



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（36-45）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2015, 13, p. 1-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105961
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳

— N0.36 アウフ・ブヌ・アルアフワス —

عَوْفُ بْنُ الْأَخْوَصِ

池田 修*

まえがき

この詩には序詩もなく、一貫した主題による統一も見られず、断片詩の寄せ集めのような印象を受ける。最後に配置されている17行と18行は、何かの手違いで本詩に付加されたもののようである。

しかし、夜間、砂漠で旅するものが道に迷い、助けを求めるために、犬の鳴き声のまねをしてテントの犬に吠えさせ、燃える火を頼りに天幕を訪ねもてなしを受ける習慣があったとか、鍋を借りて返す場合には鍋に料理の一部を残して返すとか、飢餓のときにはミルクが枯れたラクダを食用に供したとか、部族内の紛争は極力さけようとしたとかなど、興味ある言及がある。詩人についてはすでに No.35で紹介している。タウイール (*tawil*) 調、18行。

(36) テキスト

وَقَالَ عَوْفٌ أَيْضًا

- | | |
|--|--|
| ۱ - وَمُسْتَنْبِحٌ يَخْشَى الْقَوَاءَ وَدُونَهُ | مِنَ اللَّيْلِ بَابًا ظُلْمَةً وَسُتُورَهَا |
| ۲ - رَفَعْتُ لَهُ نَارِي فَلَمَّا أَهْتَدَى بِهَا | زَجَرْتُ كِلَابِي أَنْ يَهْرَ عَقُورَهَا |
| ۳ - فَلَا تَسْئَلْنِي وَأَسْأَلِي عَنْ خَلِيقَتِي | إِذَا رَدَّ عَافِي الْقَدْرِ مَنْ يَسْتَعِيرُهَا |
| ۴ - وَكَانُوا قُعُودًا حَوْلَهَا يَرْقُبُونَهَا | وَكَانَتْ فَتَاةُ الْحَيِّ مِمَّنْ يُبِيرُهَا |
| ۵ - نَرَى أَنَّ قِدْرِي لَا تَزَالُ كَانَتْهَا | لِذِي الْقُرْوَةِ الْمَقْرُورِ أَمْ يَزُورُهَا |
| ۶ - مُبَرَّزَةً لَا يُجْعَلُ السِّتْرُ دُونَهَا | إِذَا أَحْمَدُ الْبَيْرَانِ لَاحَ بِشِيرُهَا |
| ۷ - إِذَا الشَّوْلُ رَاحَتْ ثُمَّ لَمْ تَقْدِرْ لِحَمَّهَا | بِأَلْبَانِهَا ذَاقَ السِّنَّانُ عَقِيرُهَا |
| ۸ - وَإِنِّي لَتَرَاكَ الضَّعِيفَةَ قَدْ بَدَا | ثَرَاهَا مِنَ الْمَوْلَى فَلَا أَسْتَشِيرُهَا |
| ۹ - مَخَافَةً أَنْ تَجْنِي عَلَيَّ، وَإِنَّمَا | يَهِيْجُ كَبِيرَاتِ الْأُمُورِ صَغِيرُهَا |

* 大阪外国語大学 名誉教授

- ١٠- تَسُوقُ صُرَيْمَ شَاءَهَا مِنْ جُلَاجِلٍ
 ١١- إِذَا قِيلَتْ الْعَوْرَاءُ وَلَيْتُ سَمَعَهَا
 ١٢- فَمَآذَا نَقَمْتُمْ مِنْ بَيْنِ وَسَادَةٍ
 ١٣- هُمْ رَفَعُوكُمْ لِلْسَمَاءِ فَكَذَّبْتُمْ
 ١٤- مُلُوكُكَ عَلَى أَنَّ التَّحِيَّةَ سُوقَةٌ
 ١٥- فَإِلَّا يَكُنْ مِنِّي ابْنُ زَحْرٍ وَرَهْطُهُ
 ١٦- وَكَعْبٌ فَإِنِّي لَا بَنُهَا وَحَلِيفُهَا
 ١٧- لَعَمْرِي لَقَدْ أَشْرَفْتُ يَوْمَ عُنَيْزَةٍ
 ١٨- وَلَكِنَّ هُلْكَ الْأَمْرِ أَنَّ لَا ثَمَرَهُ
- إِلَى وَدُونِي ذَاتُ كَهْفٍ وَفُورُهَا
 سِوَايَ وَلَمْ أَسْأَلْ بِهَا: مَا دَبِيرُهَا
 بَرِيءٌ لَكُمْ مِنْ كُلِّ غِمْرٍ صُدُورُهَا
 تَنَالُونَهَا لَوْ أَنَّ حَيًّا يَطُورُهَا
 أَلَايَاهُمْ يُوفَى بِهَا وَتُذَوَّرُهَا
 فَمِنِّي رِيَّاحٌ عَرَفُهَا وَنَكِيرُهَا
 وَنَاصِرُهَا حَيْثُ اسْتَمَرَ مَرِيرُهَا
 عَلَى رَغَبَةٍ لَوْ شَدَّ نَفْسًا ضَمِيرُهَا
 وَلَا حَيْرَ فِي ذِي مِرَّةٍ لَا يُغِيرُهَا

No.36 訳

- 1- 何と多くの旅人が、犬を吠えさせるためその鳴き声をまね、荒野で死を恐れていたことだろうか。その行く手には闇が重なり、その帳（とばり）が行く手を遮っていた¹⁾。
- 2- 私は旅人のために火を高く上げてやる。彼が火に導かれてくると、私は、噛みつこうとして吠える飼い犬を叱りつけた。
- 3- 鍋の借り手が、鍋に料理の一部を残して返すとき、そなたは私に尋ねるのではなく、私の人柄を（他の者に）尋ねるがよい²⁾。
- 4- 彼らは鍋の周りに座って、煮えるのを待ち焦がれていた。部族の娘も鍋の火を燃やす人々に加わっていた。
- 5- さすればそなたは私の鍋が、寒さに震える毛皮を着た旅人が訪ねる（食事を整えた）母親のようなものであるのに気づこう。
- 6- (他の人々が) 火を消すときも、私は火が目立つようにし、帳で隠したりしないので、火の明りは旅人によく届く³⁾。
- 7- 乳が涸れたラクダが夕方、牧草地から帰ってきて、肉づきを犠牲にしながら乳を出さず子を産まぬなら、槍の穂先で屠られるであろう⁴⁾。
- 8- 私は従兄弟が示す憎悪の一滴を知らぬふりをする者であり、憎しみの念を煽り立てたりはしない。

1) *mustanbih* は「犬の鳴き声をまねして、わざとテントの飼い犬を吠えさせ、その鳴き声でテントの在りかを知って頼っていく旅人」。これは No.28-7 ですでに出ている。この行はいきなり *wāw rubba* で始まっており、それより前に何行かが欠落していることをうかがわせる。

2) アルアスマイーによると、飢饉のさい鍋を借りた者は返すとき、鍋に料理の一部を残して返すのがしきたりだった。この条件文の帰結節は5行目要求法 *taray* 「気づくだろう」。

3) 夜、荒野を旅して道に迷うものにとって、テントの在りかを知らせる「火の明かりを消さない」とは、「気前の良い者であること」を表している。

4) おそらく冬季に牧草が枯れて、ラクダがミルクを出さなくなったとき、ラクダを食用に供したことを語ったものであろう。

- 9- それはお前が私に罪を犯すのを恐れてのことである。ひとえに小事は大事を引き起こすものである⁵⁾。
- 10- スライム族がジュラーヅルから羊を追って私のほうへ (風刺された仕返しに) やってくる。だが私と彼らとの間は、ザート・カフフとその高い丘陵地が隔てているのだが⁶⁾。
- 11- 悪口雑言が言われても、他人はともかく私は聞かない。その狙いが何であるかも尋ねたりしない。
- 12- お前たちは息子たちや首領たちに、何で恨みを晴らそうとするのか。彼らの胸はお前たちに対して、いかなる敵意も抱いてはいないのだが⁷⁾。
- 13- 彼らは (輝かしい功績で) お前たちの地位を天まで高めた。もし命ある者が天に近づくことができたなら、お前たちはまさに天を手にするところであった。
- 14- (彼らは) 王侯である。(しかし、彼らは威張らず) 人々には臣下と同じ挨拶をする。彼らの誓いや願掛けは必ず果たされる。
- 15- たとえ、イブン・ザフルとその縁者が私との血縁がないとしても、リヤーフは喜怒哀楽いづれの時にも血縁者である⁸⁾。
- 16- カアブとも血がつながっている。すなわち私はこの部族の子であり同盟者であり、彼らが困難に遭遇したときの支援者である⁹⁾。
- 17- 私はこの生命にかけて言うが、ウナイザでの戦いの日、決意を固めて臨めば、(所期の目的を達成したのに、気を緩めたのを後悔している)¹⁰⁾。
- 18- それ (ロープ) を強く撚 (よ) らない者は企てに失敗する。これを撚る者が、強く撚らなければ無益である。

5) 8-9行の2行は12-16行とかかわりがあるものであろう。8行の *al-mawlā* は「父方の伯父の息子」を指す。

6) この行は11行の後に配置するのが妥当。「スライム (*Ṣuraym*) 族」はダッバ族の支族で、詩人側のアーミル族とは対立していた。「羊を追って…」は「馬もラクダも所有していない」と皮肉った表現。「ザート・カフフ (*Dhāt Kahf*)」はアーミル族の領域にある高い丘陵地。

7) この行から16行までは断片的言辞の寄せ集めで、一貫した話になっていないが、多分、No.35での、兄弟部族アブー・バクル・ブヌ・キラブ (*ʿAbū Bakr b. Kilāb*) に言ったものであろう。ただし、13行はシウブ・ジャバラの戦いでの勝利と関係がありそうである (No.35参照)。

8) 「イブン・ザフル (*Ibn Zahr*)」が何者であるか不明。「リヤーフ (*Riyāh*)」は *Riyāh b. ʿAshall al-Ghanawī* のことで、ガニー (*Ghanī*) 族の者。この部族は詩人の母の出身部族であり、アーミル・ブヌ・サアサア族と同盟していた。

9) 「カアブ (*Kaʿb*)」は *Kaʿb b. Rabʿa b. ʿĀmir b. Ṣaʿṣaʿa* のことで、*Kilāb* の兄弟。 *ḥaythu stamarra marīru-hā* 「ロープが振られ強くなった」が直訳で、解説で「困難に直面したの意」とあるのに従った。アルアスマイーによると、「詩人は血縁者であるリヤーフやカアブを語ることで、イブン・ザフルを見下し、嘲っている」としている。

10) 「ヤウム・ウナイザ (*Yawm ʿUnayza*)」はアルバサースの一連の戦いのひとつで、ラビーア系のタグリブとバクル両部族間の内紛 (*M. A. Jād et al., ʿAyyām al-ʿArab*, Cairo, 1961, p.156、以下頁数のみ)。なお、『歌の書』(11, p.95) には、この詩と大部分がそっくりの詩が、本詩集 No.34のシャビーブ作として記録されている。

— (37) あるユダヤ人の男 —

まえがき

本詩集の編者、アルムファッダルが「われわれに詠み聞かせたあるユダヤ人 (男) の詩」と表題にある「われわれ」とはイブン・アルアーラービー (詩の伝承者の1人) のことで、ユダヤ人の名前は全く分らない。

これは、8行よりなる短い詩であるが、求婚した女性が他の男と結婚したことを妻になじられ言い訳をしているユニークな作品である。『歌の書』(11, p.78) には、この詩の冒頭4行以降に本詩と異なる4行を加え、8行の詩を載せてあり、カリフ・アリーの子、アブドアッラー・ブヌ・ムアーウィヤ (°Abd °Allāh b. Mu°āwiya) の作としている。

この人物はウマイヤ期に、カリフ・マルワーン2世 (在位744-750) の時代に反乱を起こしたが、アッバース家運動を唱道したアブー・ムスリム・アルホラサーニーに捕らえられ、AH 131年 (AD 746-7年) に処刑されている。推測であるが、アルムファッダルはアブドアッラーと同じ頃、クーファで暮らしており、知り合いであったと思われる。後者は前者がこの詩を詠むのを聞いて、前半の4行を一部の単語を変えてまね、前述の4行を加えて、自分の作とした可能性が高い。なお、『歌の書』(11, pp.78-9) には、この詩の由来について次のような逸話をつたえている。

アブドアッラー・ブヌ・ムアーウィヤ (°Abd °Allāh b. Mu°āwiya) はムハンマド・ブヌ・アブドアッラー・ブヌ・ムハンマド (Muḥammad b. °Abd °Allāh b. Muḥammad) の娘ラビーハ (Rabīḥa) に求婚した。つまり、いどこに求婚した。ところが、この娘に対しては、バッカー・ブヌ・アブドアルマリク (Bakkār b. °Abd al-Malik) も求婚していた。彼女は後者と結婚した。そこで、アブドアッラーはザイド・ブヌ・アリー・ブヌ・アルフサイン (Zayd b. °Alīy b. al-Ḥusayn) の娘ウンム・ザイド (°Umm Zayd) を妻にした。すると、この妻は、夫がラビーハと結婚できなかったふがいなさを罵った。夫は、罵った妻への返答としてこの詩を詠んだ。

ムタカーリブ (*mutaqālib*) 調、8行。(『歌の書』による追加4行も訳したので、テキストは8行だが、訳は12行になっている。Lyall 校訂テキスト p.354脚注参照)。

(37) テキスト

وَأَنْشَدَنَا الْمُفَضَّلُ لِرَجُلٍ مِّنَ الْيَهُودِ

١ - سَلَا رَبَّةَ الْخِذْرِ مَا شَأْنُهَا وَمِنْ أَيِّ مَا فَائِنَا تَعْجَبُ

٢ - فَلَسْنَا بِأَوَّلِ مَنْ فَاتَهُ عَلَى رَفِيقِهِ بَعْضُ مَا يَطْلُبُ

٣- فَكَايْنِ تَضَرَّعَ مِنْ حَاطِبٍ تَزَوَّجَ غَيْرَ الَّتِي يَخْطُبُ
 ٤- وَزَوْجَهَا غَيْرُهُ دُونَهُ وَكَانَتْ لَهُ قَبْلَهُ تُحْجَبُ
 ٥- وَقَدْ يُدْرِكُ الْمَرْءَ غَيْرُ الْأَرِيبِ وَقَدْ يُصْرَعُ الْحَوْلُ الْقُلْبُ
 ٦- أَلَمْ تَرَ عُصْمَ رُؤُوسِ الشَّطَا إِذَا جَاءَ فَأَنْصَحَهَا تُجْلَبُ
 ٧- إِلَيْهِ وَمَا ذَاكَ عَنْ إِرْبَةٍ يَكُونُ بِهَا قَانِصٌ يَأْرَبُ
 ٨- وَلَكِنْ لَهَا أَمْرٌ فَادِرٌ إِذَا حَاوَلَ الْأَمْرَ لَا يُغْلَبُ

٩- لِإِنْ شَطَطَ الدَّارُ عَنَّا بِهَا فَفَاتَتْ فِي الدَّارِ مُسْتَعْتَبُ
 ١٠- وَكُنَّا قَدِيمًا صَفِيَيْنِ لَا نَخَافُ الْوُشَاةَ وَمَا شَبَّوْا
 ١١- فَأَصْبَحَ صَدُغٌ الَّذِي بَيْنَنَا كَصَدْعِ الزُّجَاجَةِ لَا يُشْعَبُ
 ١٢- وَكَالْدَرٍّ لَيْسَتْ لَهُ رَجْعَةٌ إِلَى الضَّرْعِ مِنْ بَعْدِ مَا يُحْلَبُ

No.37 訳

- 1- 帳のなかの婦人に、何を問題としているのか、われらがやり損ねたどの件に驚いているのか、二人で尋ねてみよ¹⁾。
- 2- すなわち、われらは、やさしく接したにもかかわらず、求めたものを取り逃がした最初の者ではないからだ。
- 3- なんと多くの求婚者が、(結婚してくれと) 嘆願しながら、求婚した相手とはちがう女性と結婚していることよ。
- 4- 求婚者の代わりに、他の男が彼女と結婚させられた。もっとも、彼女は、求婚した男に対してヴェールをして (承諾の意をあらわしていたのだが)。
- 5- 分別の無い者が願望を遂げ、技巧に優れ、先見の明ある者が、しばしば、倒されるものだ。
- 6- あなたは見ないか。山頂にいる足の白い野生のヤギが、猟師が近づくと、これに引き寄せられるのを。
- 7- 猟師のほうへ引き寄せられるが、それは、猟師が抜け目なく、巧みに引き寄せたのではない。
- 8- そうではなく、野生のヤギに対して命令し、運命を定めるお方 (神) がおられるからだ。神が事を成そうと思し召せば、決して、これを覆すことは出来ない²⁾。

(これ以下は『歌の書』による追加分4行)

1) *salā* は *sa'ala* 「尋ねる」の双数命令形。

2) 全能の神の威力が示されており、イスラーム時代の作品であることを物語っている。

- 9- もし、彼女の住まいが遠く離れていて、私とはるかに隔てられていたなら、この住まいに彼女を喜ばせるものが求められようか。
- 10- かつては、我々は、清らかな愛情で結ばれた二人であった。中傷や偽りの噂話も恐れることはなかった。
- 11- だが、われら夫婦の間には亀裂が生じた。これは修理が出来ないガラスの亀裂のようなものだ。
- 12- あるいは、搾り出されたミルクが乳房に戻せないような亀裂である。

—— (38) ラビーア・ブヌ・マクルーム ——

رَبِيعَةُ بْنُ مَقْرُومٍ

まえがき

本名ラビーア・ブヌ・マクルーム・ブヌ・カイス (Rabīʾ b. Maqrūm b. Qays)。本詩集にはこの詩人による4篇の詩が載っている (No.38, 39, 43, および113)。これらすべてにおいて彼は、自身または自部族の戦闘における勇敢さを誇っている。アルムファッダルはダッバ族の人であり、この部族ゆかりの詩人に格別の関心を抱いていたのであろう。

タミーム族がヤマンからペルシャの都マダーインに向かっていた隊商を襲って略奪した事件が (611年頃) あり、アルムシャッカル城のペルシャ総督に懲罰として襲撃され、ラビーアは捕らえられた (No.30参照)。どれほどの期間捕らえられていたかは分からないが、釈放後、イスラームに入信し、AH 15年 (AD 637年) の対ペルシャ戦、アルカーディシーアとその翌年末のジャルラーの戦いに参加している。彼は長生きし100歳に達したと伝えられているが、確かめようがない。ただ、彼は、生まれるよりも以前の部族の功績を数え上げているので、このような長生説が囁かれたと思われる。

詩人の属したダッバ族はアッリバーブ連合の一員であった。すなわち、この連合には、ダッバ、タイム、アディー、アウフ、およびダッバの兄弟部族アブド・マナートなどが参加していた。この連合はタミーム族と関係が深く、タミーム連合のことを、父方の叔父の関係 (*ʿumūma*) とみなしていた。系譜学者によれば、タミームはダッバとアブド・マナートの兄弟のムッル (Murr) の子孫とされている。このような関係があったため、戦闘に際しては、アッリバーブはタミームの味方であった (38-9行)。しかし、一度だけ、アンニサル (al-Nisār) の戦いではタミームに敵対した (31行以下)。連合の領域は、タミームのそれに隣接する比較的肥沃なアルカシームの北方のハイド (今日のハーイル) 周辺であった。

この詩には、ジャーヒリーヤ時代にアラブが戦った日のうち、ブザーハ (Buzākha)、アンニサル (al-Nisār)、ティフファ (Tikhfa)、第2次アルクラブ、および、ザート・アッスライム (Dhāt al-Sulaym) などの戦いの日々への言及があり、注目される。この詩においては、序詩、ラクダによる旅、野生のロバ、これを狙う獵師、詩人および部族の気前よさ、武勇、武器および馬などを誇らしく詠んでいる。ムタカーリブ (*mutaqālib*) 調、45行。

(38) テキスト

وَقَالَ رَبِيعَةُ بْنُ مَفْرُومٍ

- ١ - أَمِنْ آلِ هِنْدٍ عَرَفْتَ الرُّسُومَا
- ٢ - تَحَالُ مَعَارِفَهَا بَعْدَ مَا
- ٣ - وَقَفْتُ أَسْأَلُهَا نَافَتِي
- ٤ - وَذَكَرَنِي الْعَهْدَ أَيَّامُهَا
- ٥ - فَفَاضَتْ دُمُوعِي فَنَهْنَهَتْهَا
- ٦ - فَعَدَّيْتُ أَدَمَاءَ عَيْرَانَةَ
- ٧ - كِنَازَ الْبَضِيعِ جَمَالِيَّةَ
- ٨ - كَأَنِّي أَوْشَحُ أَنْسَاعَهَا
- ٩ - يُحَلِّيُ مِثْلَ الْقَنَا دُبَالًا
- ١٠ - رَعَاهُنَّ بِالْقَفِّ حَتَّى ذَوَتْ
- ١١ - فَظَلَّتْ صَوَادِي خُزَرَ الْعُيُونِ
- ١٢ - فَلَمَّا تَبَيَّنَ أَنَّ النِّهَارَ
- ١٣ - رَمَى اللَّيْلُ مُسْتَعْرِضًا جَوْرَهُ
- ١٤ - فَأَوْرَدَهَا مَعَ ضَوْءِ الصَّبَاحِ
- ١٥ - طَوَامِي خُضْرًا كَلَوْنَ السَّمَاءِ
- ١٦ - وَبِالْمَاءِ قَيْسٌ أَبُو عَامِرٍ
- ١٧ - وَبِالْكَفِّ زَوْرَاءُ حِرْمِيَّةَ
- ١٨ - وَأَعْجَفُ حَشَرٌ تَرَى بِالرِّصَا
- ١٩ - فَأَخْطَاهَا فَمَضَتْ كُلُّهَا
- ٢٠ - وَإِنْ تَسْأَلِينِي فَلِإِنِّي أَمْرُؤُ
- ٢١ - وَأَبْنَى الْمَعَالِي بِالْمَكْرُمَاتِ
- ٢٢ - وَيَحْمَدُ بَذْلِي لَهُ مُعْتَفٍ
- ٢٣ - وَأَجْزَى الْقُرُوضِ وَفَاءَ بِهَا
- ٢٤ - وَقَوْمِي فَإِنَّ أَنْتَ كَذَّبْتَنِي
- ٢٥ - أَلَيْسُوا الَّذِينَ إِذَا أَزَمَةُ
- بِجُمْرَانَ فَقَرًّا أَبَتْ أَنْ تَرِيَمَا
- أَتَتْ سَتَانِ عَلَيْهِمَا الْوُشُومَا
- وَمَا أَنَا أَمْ مَا سُؤَالِي الرُّسُومَا
- فَهَاجَ التَّذَكُّرُ قَلْبًا سَقِيمَا
- عَلَى لِحْيَتِي وَرَدَائِي سُجُومَا
- عُذَافِرَةً لَا تَمَلُّ الرِّسِيمَا
- إِذَا مَا بَعَمَنْ تَرَاهَا كُثُومَا
- أَقَبَّ مِنَ الْحُفْبِ جَابًا شَتِيمَا
- ثَلَاثًا عَنِ الْوَرْدِ قَدْ كُنَّ هِيمَا
- بُقُولُ التَّنَاهِي وَهَرَّ السَّمُومَا
- إِلَى الشَّمْسِ مِنْ رَهْبَةٍ أَنْ تَغِيَمَا
- تَوَلَّى وَآنَسَ وَحَفَا بِهِيمَا
- بِهِنَّ مِرْرًا مِثْلًا عَذُومَا
- شَرَائِعَ تَطَحَّرَ عَنْهَا الْجَمِيمَا
- يَزِينُ الدَّرَارِي فِيهَا النُّجُومَا
- يُؤَمِّلُهَا سَاعَةً أَنْ تَصُومَا
- مِنَ الْقُضْبِ تُعْقِبُ عَرْفًا نَعِيمَا
- فِ مِمَّا يُخَالِطُ مِنْهَا عَصِيمَا
- تَكَادُ مِنَ الدُّعْرِ تَفْرِي الْأَدِيمَا
- أُهَيِّنُ اللَّيْمَ وَأُخْبُو الْكَرِيمَا
- وَأَرْضِي الْخَلِيلَ وَأُرْوِي النَّدِيمَا
- إِذَا دَمٌ مَنْ يَعْتَفِيهِ اللَّئِيمَا
- يُبْؤَسَى بَعِيسَى وَنُعْمَى نَعِيمَا
- بِقَوْلِي فَاسْتَلْ بِقَوْمِي عَلِيمَا
- أَلَحْتُ عَلَى النَّاسِ تُنْسِي الْحُلُومَا

- ٢٦- يُهَيِّنُونَ فِي الْحَقِّ أَمْوَالَهُمْ
 ٢٧- طَوَّالَ الرِّمَاحِ عِدَاةَ الصَّبَاحِ
 ٢٨- بَنُو الْحَرْبِ يَوْمًا إِذَا اسْتَلَّامُوا
 ٢٩- فِدَى بِبُرْخَاةٍ أَهْلِي لَهُمْ
 ٣٠- وَإِذْ لَقِيتَ عَامِرَ بْنَ النَّسَا
 ٣١- بِهِ شَاطِرُوا الْحَيِّ أَمْوَالَهُمْ
 ٣٢- وَسَاقَتْ لَنَا مَذْحِجٌ بِالْكُلَّابِ
 ٣٣- فَدَارَتْ رَحَانًا بِفُرْسَانِهِمْ
 ٣٤- بِطَعْنٍ يَجِيشُ لَهُ عَانِدٌ
 ٣٥- وَأَضْحَتْ بَتِيمُنْ أَجْسَادُهُمْ
 ٣٦- تَرَكْنَا عُمَارَةَ بَيْنَ الرِّمَاحِ
 ٣٧- وَلَوْ لَا فَوَارِسُنَا مَا دَعَتْ
 ٣٨- وَمَا إِنْ لَأَوْيَتْهَا أَنْ أَعَدَّ
 ٣٩- وَلَكِنْ أَذْكَرُ آلَاءِنَا
 ٤٠- وَدَارِ هَوَانٍ أَنْفَنَا الْمُقَامِ
 ٤١- إِذَا كَانَ بَعْضُهُمْ لِلْهَوَانِ
 ٤٢- وَتَغَرَّ مَخُوفٍ أَقْمَنَّا بِهِ
 ٤٣- جَعَلْنَا السُّيُوفَ بِهِ وَالرِّمَاحَ
 ٤٤- وَجُرْدًا يُقَرَّبْنَ دُونَ الْعِيَالِ
 ٤٥- تَعَوَّدُ فِي الْحَرْبِ أَنْ لَا بَرَاحَ
 إِذَا اللَّزَبَاتُ التَّحِينَ الْمُسِيمَا
 ذَوُو نَجْدَةٍ يَمْنَعُونَ الْحَرِيمَا
 حَسِبَتْهُمْ فِي الْحَدِيدِ الْقُرُومَا
 إِذَا مَلَأُوا بِالْجُمُوعِ الْحَزِيمَا
 مِنْهُمْ وَطِخْفَةً يَوْمًا غَشُومَا
 هَوَازِنَ، ذَا وَفْرِهَا وَالْعَدِيمَا
 مَوَالِيهَا كُلَّهَا وَالصَّمِيمَا
 فَعَادُوا، كَأَنَّ لَمْ يَكُونُوا، رَمِيمَا
 وَضَرْبٍ يُفْلِقُ هَامًا جُثُومَا
 يُشَبِّهُهَا مَنْ رَأَاهَا الْهَشِيمَا
 عُمَارَةَ عَبَسَ نَزِيفًا كَلِيمَا
 بِذَاتِ السُّلَيْمِ تَمِيمٌ تَمِيمَا
 مَآثِرَ قَوْمِي وَلَا أَنْ أَلُومَا
 حَدِيثًا وَمَا كَانَ مِنَّا قَدِيمَا
 بِهَا فَحَلَلْنَا مَحَلًّا كَرِيمَا
 خَلِيطَ صَفَاءٍ وَأُمَّا رُؤُومَا
 يَهَابُ بِهِ غَيْرُنَا أَنْ يُقِيمَا
 مَعَاقِلَنَا وَالْحَدِيدَ النَّظِيمَا
 خِلَالَ الْبُيُوتِ يَلْكُنُ الشَّكِيمَا
 إِذَا كَلِمَتُ لَا تَشْكِي الْكُلُومَا

No.38 訳

- 1- あなたは、ジウムラーンのヒンド一家の住まい跡を認めたか。それは、荒れ果ててはいるが消え去るのを拒んでいる。
- 2- あなたは、住居跡だと認められていたいたものが、2年たった今は、刺青模様になったと思うであろう。
- 3- 私は雌ラクダを止めて、住まい跡に尋ねたが、一体、私は廃墟に何を尋ねるべきか。
- 4- (彼女の) 住まい跡を示す印¹⁾が、私に彼女との追憶を呼び起こし、(彼女への思い出に) 病む心をかき立てた。

1) ʾayyāmu-hā「日々」では意味を成さないの、アフマドが伝えている ʾāyātu-hā「印」で訳した。

- 5-すると、涙があふれ出て、止めようとしたが (止まらず)、私の顎鬚と着衣に注がれて、濡らした。
- 6-そこで、私は、野生のロバのように頑強な大型の白い雌ラクダをそこから移動させた。このラクダは足跡を残すような重い歩調²⁾にも、疲れを見せない。
- 7-ラクダの肉はよく引き締まり、雄ラクダのように力強く、他のラクダが悲鳴をあげても、声を抑えているのに、あなたは気付くであろう。
- 8-まるで、私はラクダの腹帯を、顔は醜いが頑強で、よく引き締まった体形の腹部の白い野生のロバに、縛りつけているかのようであった。
- 9-槍のように細く引き締まった体形の雄ロバは、渇きに苦しんでいる3頭の雌ロバが水場にいくのをさえぎっていた。
- 10-雄ロバは雌ロバたちに、丘の上の窪地で (水が乾ききり) 草が枯渇するまで食べさせ、自身は熱風に悩まされていた³⁾。
- 11-雌ロバは、目を細めて太陽を見つめていた。燃えるような渇きに襲われるのではないかと恐れていたのである。
- 12-雄ロバは昼間が終わったことを確かめ、真っ暗の夜になったと見て取ると、
- 13-突進して、雌ロバたちを夜の間に投げ込む。雌ロバに噛みついたり追いかけて、さらに、噛みついて (水場へ) 急行させる。
- 14-雄ロバが雌ロバたちを、朝の光がさす頃、水場へつれてくると、泉に浮かぶごみは (風などにより) 脇に押しやられていた。
- 15-泉には水が満ち澄み切って、空の色のように緑色であった。雌ロバたちは、その水面に星の影が点々と輝いているのを見た⁴⁾ (または、輝く天体が泉を星で飾っていた)。
- 16-水場には、アーミルの父、カイスという狩人が待ち構えていて、ロバたちが立入って、ひと時、水を飲む機会を狙っていた。
- 17-彼の手には、(メッカの) 聖域で育った木の枝で作られた弓が握られていた。それは、引き絞って矢を放つと、びゅんという音をだす弓であった。
- 18-(また、彼の手には) 細い矢が握られていた。矢はずの下部が、獲物の血で汚れているのが見えるであろう。
- 19-カイスはロバを射損ねてしまい、すべてのロバは恐怖にかられ、皮を破りかねない勢いで、逃げてしまった。
- 20-もし貴女⁵⁾が、私がどのような人間かと尋ねるならば、(答えよう)。私は貪欲な者を蔑み寛大な者に贈り物をする男だ。
- 21-私は高貴な行いで名声を築き、貧しい者⁶⁾を満足させ、気の合う友に酒を注ぐ男だ。
- 22-恵みを求める者は、私が彼に与えたことを讃え、貪欲な者を非難する。
- 23-私は借りた物は誠実に完済する。即ち、悪に対しては悪で、善に対しては善で報いる。
- 24-私の部族について、私の言葉が信じられなければ、良く知っている者に尋ねよ。
- 25-彼ら (わが部族) は、飢饉が相次いで人々を襲い、分別を失わせるとき、

2) ラクダの歩調には、*‘anaq*「速歩調」、*tazayyud*「両足を広げる歩調」、*dhamīl*「緩歩調」、*rasīm*「足跡を残すような重歩調」などがある。

3) 雄ロバは日没の時刻にならないと、雌ロバを水場に行かせない。

4) アフマドによる *yarayna ad-darārīya fī-hā n-nujūmā*「星の影が点々と輝いているのを見た」の伝承によって訳した。

5) この「貴女」は便宜的な質問者で、冒頭の、かつての恋人ではない。

6) *al-khalīl*は「親友」でなく、「貧者」の意味で用いている。

- 26- 不作が家畜の持ち主たちを困窮させる⁷⁾とき、惜しみなく財産を費やして、債務の支払いを果たしてやる者ではないのか、と (問え)。
- 27- わが部族は早朝、襲撃されると、長い槍で防ぐ。また、彼らは勇敢で、子女を守り抜く。
- 28- 彼らは戦争の子らであり、武具をまとった日の姿を見て、あなたは彼らを、鉄で身を固めた種ラクダかと思うであろう。
- 29- ブザーハ⁸⁾の固い土地を、彼らが大军で満たしたとき、わが一族を彼らの身代わりにしてやりたかった。
- 30- アーミル (ブヌ・サアサア) 族はアンニサルとティフファ⁹⁾の地で彼らと遭遇したが、それは悲惨な日であった。
- 31- アンニサルでの戦いの日、彼らはハワージンの部族全て¹⁰⁾に、富者も貧者も等しく、財産の半分を差し出させた。
- 32- マズヒジュはアルクラブ¹¹⁾で、連合軍全てと (部族の) 純血者らを率いて、われらに向かってきたが、
- 33- 我らの戦いの碾き臼が彼らの騎士たちを粉碎し¹²⁾、そのため、彼らはまるで、存在しなかったように、朽ち果てた骨になってしまった。
- 34- 即ち、槍の一突きで血が絶え間なく噴出し、刀の一振りで頭蓋骨が半分に裂かれ、肩に垂れたのである。
- 35- タイムン¹³⁾では、彼らの死体は (重なり合って)、落ち葉が重なっているように見えたであろう。
- 36- 我らは、ウマーラ¹⁴⁾を槍の間に捨て置いた。即ち、ウマーラ・アブスは負傷して、

7) *iltahayna* 「皮をむく」は、「困窮させる」の意味で訳した。

8) ブザーハは、イヤード族とタグリブ族の支援を受けたガッサーン朝の王子2人 (1人の名はムハッリク *Muḥarriq*) がダッバ族を攻めたときの戦場 (*ʿAyyām al-ʿArab*, p.388)。この戦いではダッバ族が勝ち、2人の王子は捕らえられて、殺された。

9) アンニサルとティフファは、ダッバ族がアーミル・ブヌ・サアサア族を撃破した土地。アンニサールの戦いはタミームとアーミル・ブヌ・サアサア連合軍対、ダッバ、アサド、ガタフアンおよびタイイ連合軍の戦いであった。タミームは早々に逃げ、アーミルが奮戦したが、多くの首領らの婦女子が捕らえられた。結局、所有物の半分を勝者側に引き渡し、捕虜は返すという条件で和平した (*ʿAyyām al-ʿArab*, p.382)。この件は31行と一致する。ティフファはアーミル・ブヌ・サアサアの領域にあり、ここでジャアファル・ブヌ・キラーブの一支族とディバール (*Dibāb*) 族との戦いがあり、後者が敵兵27名を殺して勝った。詩人はディバールを自部族、つまり、ダッバ族とみなしているが、ディバールはアーミル・ブヌ・サアサア系のムアーウィヤ・ブヌ・キラーブを祖とする支族とされている。しかし、*Dibāb* は *Dabba* の複数形でもある。もし、詩人の言っていることが正しければ、実際に戦ったのはダッバ族ということになる (*ʿAyyām al-ʿArab*, p.93)。

10) 「ハワージン (*Hawāzin*) の全ての部族」というのは、詩人固有の誇張表現でアーミル・ブヌ・サアサア以外のハワージン・グループの多くの部族には和平条件は課されなかった。

11) アルクラブ (第二次) の戦いについては No.30前書き参照。この戦いで勝利に重要な役割を果たしたのはタイムン族であったが、詩人は、勝った側の連合軍に参加していたダッバ族を勝利者と褒めている。

12) 「碾き臼がまわる」という表現は「襲撃して敵を粉碎する」意味でよく使われる (例、アムル・ブヌ・クルスームのムアッラカ24行)。

13) タイムン (*Taymun*) またはタイマン (*Tayman*) はナジュラーンとアルクラブの間にある水場。ナジュラーンにはマズヒジュ連合の本拠があり、アルクラブでは、タミームおよびアッリバールがマズヒジュを敗走させた。彼らの多くは追走され、タイムンで殺された。

14) ウマーラ (*ʿUmāra*) はイブン・ジャード・アルアブシー (*Ibn Ziyād al-ʿAbsī*)、またの名ウマー

血を流し、弱っていた。

- 37- もし我が部族の騎士らがいなかったなら、タミーム族は、ザート・アッスライム¹⁵⁾での戦いの日、戦呼をあげられなかったであろう。
- 38- 私は、我が部族の偉業を数え上げることによって、タミームを辱め、非難しようとしているのではない。
- 39- そうではなく、私は最近と往時において、(タミームに与えた) 恩恵を思い出させようとしているのである。
- 40- 我らは卑しむべき多くの館に住むのを避け、高貴な土地にテントを張って住んだ。
- 41- 一部の者が恥辱を受けながら、信頼できる仲間とやさしい母と暮らすとき、
- 42- 我らは、しばしば、恐ろしい辺境を守るために、他の者たちが留まるのを恐れる土地に駐留した。
- 43- 我らは、そこを、刀と槍と鎖で織った鎧でもって、砦とした。
- 44- また、短毛の馬を控えさせていたが、馬は子供たち以上に大切に飼われ、テントの中で轡をかねていた。
- 45- 馬は戦争に慣れていて、逃げることなく、負傷しても、苦痛を訴えることもない。

ラ・アルワッハーブ (ʿUmāra al-Wahhāb) のことで、アブスの族長。彼の母はビント・アルフルシュブ・アルアンマーリーヤ (Bint al-Khurshub al-ʿAnmārīya)。彼女は本詩集 No.5および No.6のサラマ・アルフシュブの妹である。

ウマーラはダッパの族長アル・ムサッリム (al-Muthallim) と諸け事をして勝ち、ラクダ10頭をせしめることになった。後者は息子のシルハーフ (Shirhāf) を人質としてあずけ、ラクダを連れてくるために帰った。やがて、ラクダを連れてきて、相手に渡し、息子を連れて帰路に着いた。その道中、息子が、「ミウダール (Mīdāl) とは誰のことか?」と父に尋ねた。父は、「お前の (または、私の) 徒兄弟だが、行方が分からなくなった」と答えた。息子は、「彼を殺したのは、ウマーラだ。彼が酔っ払って一族の者にそのように話していた」と告げた。やがて、アブス族がダッパ族に略奪戦を仕掛けてきた。親子はこの機会にウマーラを狙い、首尾よく復讐した。この1行には以上の逸話が背景をなしている。この事件は570年頃より前に起こったと言われている。

- 15) ザート・アッスライム (Dhāt al-Sulaym) は地名であるが、ここでの戦いの日は ʿAyyām al-ʿArab にも記載がなく、詳細は不明である。

— (39) ラビーア・ブヌ・マクルーム —

رَبِيعَةُ بْنُ مَقْرُومٍ

まえがき

この詩人については、直前の No.38で紹介した。この詩では、恋人が心変わりをして詩人を避ける趣旨の序詩に続き、年老いて、なお、分別を取り戻す詩人は、部族をよく指導し、貧者を助け、気前が良く、勇敢であると誇っている。さらに、明白な論拠によって論敵に反駁する、夜半に荒野の荒れ果てた水場をラクダに乗って訪ねる勇気を誇り、ラクダの駿足ぶりを獵師に狙われた野生のロバの逃げ足の速いのに比すなど、No.38の詩とよく似ている点が見受けられる。ワーフィル (wāfir) 調、31行。

(39) テキスト

وَقَالَ رَبِيعَةُ أَيْضًا

- | | |
|--|---|
| وَجَدَّ الْبَيْنُ مِنْهَا وَالْوَدَاعُ | ١ - أَلَا صَرَمَتْ مَوَدَّتَكَ الرُّوَاغُ |
| فَلَجَّ بِهَا، وَلَمْ تَرِعْ امْتِنَاعُ | ٢ - وَقَالَتْ إِنَّهُ شَيْخٌ كَبِيرُ |
| وَلَا حَ عَلَى مَنْ شَيْبَ قِنَاعُ | ٣ - فَإِمَّا أُمْسٍ قَدْ رَاجَعْتُ حِلْمِي |
| وَغِبْتُ عَدَوَاتِي كَلًّا جُدَاعُ | ٤ - فَقَدْ أَصِلُ الْخَلِيلَ وَإِنْ نَأْنِي |
| فَلَا يُسْدِي لَدَيَّ وَلَا يُضَاعُ | ٥ - وَأَخْفَظُ بِالْمَغِيبَةِ أَمْرَ قَوْمِي |
| وَيَكْرَهُ جَانِبِي الْبَطْلُ الشُّجَاعُ | ٦ - وَيَسْعُدُ بِي الضَّرِيكَ إِذَا اعْتَرَانِي |
| وَأَنْ مَحَلِّي الْقَبْلُ الْيَفَاعُ | ٧ - وَيَأْبَى الدَّمَ لِي أَنْبَى كَرِيمُ |
| إِذَا تَمَّتْ زَوَافِرُهُمْ أُطَاعُ | ٨ - وَأَتْبَى فِي بَنِي بَكْرِ بْنِ سَعْدٍ |
| تُرَجَّى بِالرِّمَاحِ، لَهَا شُعَاعُ | ٩ - وَمَلْمُومٍ جَوَانِبُهَا رَدَاحُ |
| إِذَا مَا هَلَّلَ النِّكْسُ الْيَرَاعُ | ١٠ - شَهِدْتُ طِرَادَهَا فَصَبَرْتُ فِيهَا |
| عَنِ الْمُثْلَى غَنَامَاهُ الْقِدَاعُ | ١١ - وَخَصِمٍ يَرْكُبُ الْعَوْصَاءَ طَاطُ |
| يُخَيِّسُهُ لَهُ مِنْهُ صِقَاعُ | ١٢ - طُمُوحِ الرَّأْسِ كُنْتُ لَهُ لِحَامًا |
| أَخَادِعُهُ النَّوَافِرُ وَالْوِقَاعُ | ١٣ - إِذَا مَا اِنَّادَ قَوْمُهُ، فَلَانْتُ |
| لَقَى كَالْحِلْسِ لَيْسَ بِهِ زَمَاعُ | ١٤ - وَأَشَعْتُ قَدْ جَفَا عَنْهُ الْمَوَالِي |

- ١٥- ضَرِيرٌ قَدْ هَنَأْنَاهُ فَأَمْسَى
 ١٦- وَمَاءِ آحَنِ الْجَمَّاتِ قَفْرٍ
 ١٧- وَرَدْتُ وَقَدْ تَهَوَّرَتِ الثُّرَيَّا
 ١٨- جُلَّالٌ مَائِرُ الضَّبْعَيْنِ يَحْدِي
 ١٩- لَهُ بُرَّةٌ إِذَا مَا لَجَّ عَاجَتْ
 ٢٠- كَأَنَّ الرَّحْلَ مِنْهُ فَوْقَ جَابٍ
 ٢١- تِلَاعٌ مِنْ رِيَاضٍ أَتَأَفَّتْهَا
 ٢٢- فَاضٌ مُحْمَلَجًا كَالْكِرِّ لَمْتُ
 ٢٣- يُقَلِّبُ سَمَحَجًا قَوْدَاءَ طَارَتْ
 ٢٤- إِذَا مَا أَسْهَلَا قَنَبَتْ عَلَيْهِ
 ٢٥- تَجَانَفَ عَنْ شَرَائِعِ بَطْنٍ قَوٍّ
 ٢٦- وَأَقْرَبَ مَوْرِدٍ مِنْ حَيْثُ رَاحَا
 ٢٧- فَأَوْرَدَهَا وَلَوْ لَيْلٍ دَاجٍ
 ٢٨- فَصَبَّحَ مِنْ بَنَى جِلَّانٍ صِلَاً
 ٢٩- إِذَا لَمْ يَجْتَزِرْ لِبْنِيهِ لَحْمَا
 ٣٠- فَأَرْسَلَ مُرْهَفَ الْعَرَيْنِ حَشْرَا
 ٣١- فَلَهَفَ أُمَّهُ وَانْصَاعَ يَهُوَى
- عَلَيْهِ فِي مَعِيشَتِهِ اتِّسَاعُ
 تَعَمُّمٌ فِي جَوَانِبِهِ السِّبَاعُ
 وَتَحْتَ وَلِيَّتِي وَهُمْ وَسَاعُ
 عَلَى يَسَرَاتٍ مَلْزُونٍ سِرَاعُ
 أَخَادِعُهُ فَلَانَ لَهَا النَّخَاعُ
 أَطَاعَ لَهُ بِمَعْقَلَةِ التَّلَاعُ
 مِنَ الْأَشْرَاطِ أَسْمِيَّةٌ تَبَاعُ
 تَفَاوُتُهُ شَـآمِيَّةٌ صَنَاعُ
 نَسِيلَتُهَا بِهَا بِنَقٌ لِمَاعُ
 وَفِيهِ عَلَى تَجَاسُرِهَا أَطْلَاعُ
 وَحَادَ بِهَا عَنِ السَّبْقِ الْكُرَاعُ
 أَثَالٌ أَوْ غُمَازَةٌ أَوْ نُطَاعُ
 وَمَا لَعَبَا وَفِي الْفَجْرِ انْصِدَاعُ
 عَطِيفَتُهُ وَأَسْهَمُهُ الْمَتَاعُ
 غَرِيضًا مِنْ هَوَادِي الْوَحْشِ جَاعُوا
 فَحَيَّبَهُ مِنَ الْوَتْرِ انْقِطَاعُ
 لَهُ رَهْجٌ مِنَ التَّقْرِيبِ شَاعُ

No.39 訳

- 1- アッルワーウ¹⁾は、まことに、お前への愛情を断ち切り、お前は彼女と分かれ、ついに、決別してしまった。
 2- 彼女は「あの人はよぼよぼの老人だ」と言った。拒絶が彼女にまわりつき、慎みを失ったのである。
 3- 私は、白髪のヴェールが私の頭を覆う頃になって、分別を取り戻したなら、かならずや、
 4- 親しい友がたとえどんなに遠くに住んでいようと、会いに行くことだろう。私を嫌うと、その果実は不健康な牧草地となろう²⁾。
 5- 私は、不在のときでも、我が部族のことをよく見張り、部族が見放されたり、損なわれたりしないよう努めている。

1) アッルワーウ (al-Ruwāʿ) は女性の名。

2) 後半は、「私を敵に回すと、消化不良の牧草地に住んで、苦しむぞ」と脅迫したもの。

- 6- 貧しい者は私のもと³⁾にあれば幸せになり、勇敢な闘士は私と競うのを厭う⁴⁾。
 7- 私は高貴な山の正面の高所に住んでいるので、私への非難は打ち消される⁵⁾。
 8- 私は、バクル・ブヌ・サアド族のなかにあつて、彼らが集結するときには、服従される者だ⁶⁾。
 9- しばしば、重装備した騎兵集団が槍の穂先を輝かせて進撃してきた。
 10- 彼らが突進してくる戦場にいた私は、根性なしの弱虫⁷⁾が臆病風に吹かれて逃げる
 とき、腰をすえて耐えた。
 11- なんと多くの論敵が理想からはずれ、難儀な議論を仕掛けてきたことだろう。しかし、彼らに出来ることは、せいぜい、私に悪口を浴びせるだけにすぎない。
 12- 彼は、頭を上げた馬のように御しがたいが、私は彼を御する轡であり、それに連なる口輪⁸⁾であつて (勝手なまねはさせない)。
 13- 彼が (御されるのを拒み轡から) 身をよじらせば、数々の災難と鉄槌⁹⁾が彼を正し、
 (興奮した) 彼の首の静脈は静まる。
 14- なんと多くの髪を乱した乞食が、従兄弟¹⁰⁾らに見放され、鞍の敷布のように捨てられていることか。彼らには、もはや何をする余力も残っていない。
 15- 我らは、なんと多くの惨めな者たちに、救いの手を差し伸べたことであろうか。おかげで、彼らには生活に余裕が出来た。
 16- なんと多くの水をたたえた泉が、砂漠の中で荒れ果て、その周りを野獣らが行き来していたことか¹¹⁾。
 17- 私は、スバル星が沈む夜半過ぎに、そこを訪れた。私の鞍あての布の下には、大型で駿足のラクダがいた。
 18- それは巨大なラクダで、がっしりと組み合わされた四肢の上で、前足の上腕部を前後にすばやく動かす。
 19- ラクダの鼻には金輪がはめられており、道から外れると、おのずと首が曲がり、脊髓がやわらいで (元の道に戻る)。
 20- まるで、ラクダの鞍は、頑強な野生のロバに乘せられているようだ。マアクラ¹²⁾の水路の牧草は、ロバが自由に食べる。

3) *jānib-ī* 「私のそば」とは、レスリングのような競技用語らしい。つまり、「私と格闘する」のような意味と思われる。

4) この1行は2通りに解釈できる。高所に住んでいると、その明かりが遠くからでもよく見え、砂漠で迷った旅人を招き寄せもてなすのに適している。または、私はあらゆる非難を超えた高い名声を得ている、のいずれか。

5) この1行はふたと通りに解釈できる。高所に住んでいると、その明かりが遠くからでも、よく見え、砂漠で迷った旅人を招き寄せ、もてなすのに適している。または、私はあらゆる非難を超えた高い名声をえている、のいずれか。

6) *zāfirā* (pl. *zawāfir*) は、「普段は散開しているが、襲撃が知らされると集結する集団」。バクル・ブヌ・サアド (*Bakr b. Sa'd*) は、詩人の部族 *Ḍabba* 族の祖先。

7) *niks* は「鏃の壊れた矢」で、「弱い男」のこと、*yarā'* は「葦の茎」で、「中が空洞で芯のない男」をさす。

8) *ṣiqā'* は「ラクダの両目を覆う帯」と解説されているが、カイロ版では「口輪」としており、後者に従って訳した。

9) 「数々の災難と鉄槌」とは、「強力な中傷詩により、頑固でうぬぼれた相手を屈服させる」の意。

10) *al-mawālī* はここでは「従兄弟たち」の意。

11) *ta'aqqamu < tata'aqqamu* 「行き来する」。

12) マアクラ (*Ma'qula*) はアッダフナー砂漠にある地名。野生のロバの生息地。

- 21- 水路は上の牧草地から下っており、牡羊座の元からの連続する降雨に恵まれて、満水となっている¹³⁾。
- 22- ロバは、そこで、引き締まった肉をしっかりと取り戻した。まるで、撚りが緩んだロープ¹⁴⁾を、腕の良いシリアの婦人が固く縊りなおしたように、引き締まった肉付きとなった。
- 23- 雄ロバは、胴が長く首が伸びた雌ロバを、右や左に向きを変えさせた。雌ロバの抜け毛が空中に舞い、白く輝いた¹⁵⁾。
- 24- 雄ロバと雌ロバは平地に降りてくると、雌ロバが走力では雄ロバを凌ぐが¹⁶⁾、雌ロバの大胆な振る舞いにもかかわらず、雄ロバはそばから離れない。
- 25- 雄ロバはカウウの谷の水場への道から離れて行った。そこでは、アルハッラに通じる火山岩のごつごつした道が雌ロバの先行を妨げた。
- 26- 二頭が夕方たどり着いた最も近い水場はウサルかグマーザかヌターウ¹⁷⁾であった。
- 27- 夜がふけて真っ暗となると、雄ロバは雌ロバを水場に入れて水を飲ませた。やがて、夜が明けそめたが、二頭は疲れていなかった。
- 28- 朝になって、雄ロバは、バヌー・ジッラーン¹⁸⁾の毒蛇 (のように隠れている獵師) に気づいた。彼の道具は弓と矢だけであった。
- 29- 獵師は、群れの先頭を行く野獣を殺して、子供たちに新鮮な肉を食べさせていないので、彼らは飢えていた。
- 30- そこで、獵師は、先端の両側を削って細く尖らせた矢を放ったが、弓のつるが切れて、射損ねた。
- 31- 獵師は「ああ、残念、おふくろよ」と叫んだ。ロバは全速力で逃げ、疾駆した背後には、土ぼこりが空に舞い上がっていた。

13) *al-ʿashrāṭ* は牡羊座のアーレフとベーターの2つの星からなるので、*al-sharaṭāni* とも呼ばれる。雨の前兆となる星と見なされていた。*ʿasmiya* (*samāʾ*「空」の複数)。ここでは、「豪雨」の意味で使われている。

14) *karr* は、ナツメヤシの樹に登るのに用いる太いロープのこと。

15) 春草を食べて太る頃、毛が抜ける。

16) 平地では、雌ロバが走りに勝り、山地では雄ロバがこれに勝る。

17) ウサル (*ʿUṭhāl*)、グマーザ (*Ghumāza*)、ヌターウ (*Nuṭāʿ*) はいずれも、タミーム族の水場。アルハーリス・ブヌ・アルヒッリザのムアッラカ、53行にもある。

18) バヌー・ジッラーン (*Banū Jillān*) はアナザ (*ʿAnaza*) 族の支族で弓上手で知られていた。

—— (40) スワイド・ブヌ・アビー・カーヒル・アルヤシュクリー ——

سُوَيْدُ بْنُ أَبِي كَاهِلِ الْيَشْكُرِيِّ

まえがき

本名スワイド・ブヌ・アビー・カーヒル・ブヌ・ハーリサ (Suwayd b. °Abī Kāhil b. Hāritha)。この詩人は本詩集 No.25のムアッラカ詩人アルハーリス・ブヌ・ヒッリザと同じ部族に属した。『歌の書』(11, p.171-173)によると、彼はクーファ総督、アーミル・ブヌ・マスウッド・アルジュマヒーに風刺のかどで投獄されたとある。アーミルが総督になったのは AH 65 (AD 685-6) であるから、彼は、ジャーヒリーヤ時代に生まれ、イスラーム時代にわたり活躍したムハドリム詩人である。

他方、『歌の書』(20, p.137)には、ズー・カール (Dhū Qār) の戦争の項に、この戦争で輝かしい戦果を挙げたとして、自部族のヤジード・ブヌ・ハーリサ (Yazīd b. Hāritha) を賞賛した彼の詩2行が載っている。この戦いは610年か611年に起こっているの、実際に彼が従軍する年齢に達していたとは思われない。彼の詩には、自身が戦闘に参加したような詩句は見当たらず、戦士を兼ねない職業的詩人であったものと思われる。

『歌の書』で前記の項によると、彼の母はズブヤーン族のある男と結婚したが、その男に先立たれ、詩人を妊娠したままヤシュクル族のアブー・カーヒルと結婚し、やがて彼を生んだ。アブー・カーヒルはこれを認知して、スワイドという名をつけた。そのため彼は、気に入らないときは、ヤシュクルといわず、ズブヤーン族出身といていた。

彼は風刺詩人として知られていた。アルアスマイーは、この詩は *yatīma* (比類なきもの) と褒めているが、韻律、脚韻が同じ2つの詩を1つにしたもので、45行目からは、元来別の詩である (このような例は No.26のアルマッラールの詩にもある)。今一つ注目すべきは、彼の詩にはジャーヒリーヤ時代の優れた詩人、たとえば、イムル・アルカイスらの作品によって定着し、マンネリ化した常套的表現が多く用いられていることである。

最初の詩の主題はヤシュクル族の祖バクル族の賞賛である。1-22行：恋の序詩。23-29行：バクル族の領域の旅。30-44行：バクル族の賞賛。以下には順序の乱れがあり、欠落部分もあり、原詩の姿が損なわれている。45-50行：恋の序詩。51-60行：獵犬に追われる獲物。61-65行：神の全能性 (うち64行は異質)。67-74行：敵対者への風刺。75-108行：風刺合戦における詩人の勝利。ラマル (*ramal*) 調、108行。

(40) テキスト

وَقَالَ سُؤَيْدُ بْنُ أَبِي كَاهِلٍ الْيَشْكُرِيُّ

- ١- بَسَطْتُ رَابِعَةَ الْحَبْلِ لَنَا
 - ٢- حُرَّةٌ تَجْلُو شَتِيَّتَا وَاضِحًا
 - ٣- صَقَلْتُهُ بِقَضِيبٍ نَاضِرٍ
 - ٤- أَبْيَضَ اللَّوْنِ لَذِيذًا طَعْمُهُ
 - ٥- تَمْنَحُ الْمِرْآةَ وَجْهًا وَاضِحًا
 - ٦- صَافِيَ اللَّوْنِ، وَطَرَفًا سَاحِيًا
 - ٧- وَفُرُونًا سَابِغًا أَطْرَافُهَا
 - ٨- هَيْجَ الشَّوْقِ خِيَالًا زَائِرُ
 - ٩- شَاحِطٍ جَازَ إِلَى أَرْحُلِنَا
 - ١٠- أَنَسِي كَانَ إِذَا مَا أَعْتَادَنِي
 - ١١- وَكَذَاكَ الْحُبُّ مَا أَشْجَعُهُ
 - ١٢- فَأَبَيْتُ اللَّيْلَ مَا أَرْفُدُهُ
 - ١٣- وَإِذَا مَا قُلْتُ لَيْلٌ قَدْ مَضَى
 - ١٤- يَسْحَبُ اللَّيْلُ نُجُومًا ظُلَعًا
 - ١٥- وَيُزَجِّجُهَا عَلَى إِبْطَائِهَا
 - ١٦- فَدَعَانِي حُبُّ سَلَمَى بَعْدَ مَا
 - ١٧- حَبَلْتَنِي ثُمَّ لَمَّا تُشْفِنِي
 - ١٨- وَدَعْتَنِي بِرُقَاهَا، إِنَّهَا
 - ١٩- تُسْمِعُ الْخُدَاتِ قَوْلًا حَسَنًا
 - ٢٠- كَمْ قَطَعْنَا دُونَ سَلَمَى مَهْمَهَا
 - ٢١- فِي حُرُورٍ يَنْضَجُ اللَّحْمُ بِهَا
 - ٢٢- وَتَخَطَّيْتُ إِلَيْهَا مِنْ عُدَى
 - ٢٣- وَفَلَاةٍ وَاضِحٍ أَقْرَابُهَا
 - ٢٤- يَسْبُحُ الْأَلَّ عَلَى أَعْلَامِهَا
 - ٢٥- فَرَكَبْنَاهَا عَلَى مَجْهُولِهَا
- فَوَصَلْنَا الْحَبْلَ مِنْهَا مَا اتَّسَعَ
 كَشَعَاعِ الشَّمْسِ فِي الْعَيْمِ سَطَعَ
 مِنْ أَرَاكِ طَيِّبٍ حَتَّى نَصَعَ
 طَيِّبَ الرِّيقِ إِذَا الرِّيقُ حَدَعُ
 مِثْلَ قَرْنِ الشَّمْسِ فِي الصَّحْوِ ارْتَفَعَ
 أَكْحَلَ الْعَيْنَيْنِ مَا فِيهِ قَمْعُ
 غَلَلَتْهَا رِيحُ مِسْكِ ذِي فَنَعُ
 مِنْ حَبِيبٍ خَفِرٍ فِيهِ قَدَعُ
 غَضَبِ الْغَابِ طُرُوقًا لَمْ يُرَعُ
 حَالَ دُونَ النَّوْمِ مِنِّي فَأَمْتَنَعُ
 يَرْكَبُ الْهَوَلَ وَيَعْصِي مَنْ وَزَعُ
 وَبِعَيْنَيَّ إِذَا نَجَمٌ طَلَعَ
 عَطَفَ الْأَوَّلُ مِنْهُ فَرَجَعُ
 فَتَوَالِيهَا بَطِيئَاتُ التَّبَعُ
 مُعَرَّبُ اللَّوْنِ إِذَا اللَّوْنُ أَنْقَشَعَ
 ذَهَبَ الْجِدَّةُ مِنِّي وَالرَّيْعُ
 فَمُقَوِّدِي كُلِّ أَوْبٍ مَا أَجْتَمَعَ
 تُنْزِلُ الْأَعْصَمَ مِنْ رَأْسِ الْيَفْعُ
 لَوْ أَرَادُوا غَيْرَهُ لَمْ يُسْتَمْعَ
 نَازِحَ الْعَوْرِ إِذَا الْأَلَّ لَمَعَ
 يَأْخُذُ السَّائِرَ فِيهَا كَالصَّفْعُ
 بِزَمَاعِ الْأَمْرِ وَالْهَمِّ الْكَنِعُ
 بِأَلِيَّاتٍ مِثْلُ مُرْفَتِ الْقَرْعُ
 وَعَلَى الْبَيْدِ إِذَا الْيَوْمُ مَتَعَ
 بِصَلَابِ الْأَرْضِ فِيهِنَّ شَجَعُ

- ٢٦- كَالْمَعَالِي عَارِفَاتٍ لِلشَّرَى
 ٢٧- فَتَرَاهَا عُصْفًا مُنْعَلَةً
 ٢٨- يَدْرَعْنَ اللَّيْلَ يَهْوِينَ بِنَا
 ٢٩- فَتَنَاولْنَ غِشَاشًا مِنْهَا
 ٣٠- مِنْ بَنَى بَكَرٍ بِهَا مَمْلَكَةً
 ٣١- بُسِطُ الْأَيْدِي إِذَا مَا سُئِلُوا
 ٣٢- مِنْ أَنَاسٍ لَيْسَ مِنْ أَخْلَاقِهِمْ
 ٣٣- عُرِفَ لِلْحَقِّ مَا نَعِيََا بِهِ
 ٣٤- وَإِذَا هَبَّتْ شَمَالًا أَطْعَمُوا
 ٣٥- وَجِفَانٍ كَالْجَوَابِي مُلِئَتْ
 ٣٦- لَا يَخَافُ الْعَدْرَ مَنْ جَاوَزَهُمْ
 ٣٧- وَمَسَامِيحٍ بِمَا ضُنَّ بِهِ
 ٣٨- حَسَنُوا الْأَوْجُهَ بِيضٌ سَادَةٌ
 ٣٩- وَزُنُ الْأَحْلَامِ إِنْ هُمْ وَازَنُوا
 ٤٠- وَلُيُوثُ تُتَقَى عُرَّتْهَا
 ٤١- فَبِهِمْ يُنْكَى عَدُوٌّ وَبِهِمْ
 ٤٢- عَادَةٌ كَانَتْ لَهُمْ مَعْلُومَةٌ
 ٤٣- وَإِذَا مَا حُمِلُوا لَمْ يَظْلَعُوا
 ٤٤- صَالِحُوا أَكْفَائِهِمْ خُلَاثُهُمْ
 ٤٥- أَرَقَّ الْعَيْنَ حَيَالٌ لَمْ يَدْعُ
 ٤٦- حَلَّ أَهْلِي حَيْثُ لَا أَطْلُبُهَا
 ٤٧- لَا أُلَاقِيهَا وَقَلْبِي عِنْدَهَا
 ٤٨- كَالْتُّؤَمِيَّةِ إِنْ بَاشَرَتْهَا
 ٤٩- بَكَرَتْ مُزْمَعَةً نِيَّتُهَا
 ٥٠- وَكَرِيمٌ عِنْدَهَا مُكْتَبَلٌ
 ٥١- فَكَأَنِّي إِذْ جَرَى الْأَلُّ ضَحَى
 ٥٢- كُفَّ خَدَّاهُ عَلَى دِيْبَاجَةٍ
 ٥٣- يَبْسُطُ الْمَشَى إِذَا هَيَّجَتْهُ
 مُسْنَقَاتٍ لَمْ تُوشَمَ بِالنِّسَعِ
 بِنَعَالِ الْقَيْنِ يَكْفِيهَا الْوَقَعُ
 كَهْوَى الْكُذْرِ صَبَحْنَ الشَّرْعُ
 ثُمَّ وَجَّهْنَ لِأَرْضٍ تُنْتَجَعُ
 مَنْظَرٌ فِيهِمْ وَفِيهِمْ مُسْتَمَعُ
 نَفْعُ النَّائِلِ إِنْ شَيْءٌ نَفَعُ
 عَاجِلُ الْفُحْشِ وَلَا سُوءُ الْجَزَعِ
 عِنْدَ مُرِّ الْأَمْرِ مَا فِيْنَا خَرَعُ
 فِي قُدُورٍ مُشْبَعَاتٍ لَمْ تُجَعُ
 مِنْ سَمِينَاتِ الذُّرَى فِيهَا تَرَعُ
 أَبَدًا مِنْهُمْ وَلَا يَخْشَى الطَّبَعُ
 حَاسِرُو الْأَنْفُسِ عَن سُوءِ الطَّمَعِ
 وَمَرَّاجِيحُ إِذَا جَدَّ الْقَرْعُ
 صَادِقُو الْبَاسِ إِذَا الْبَاسُ نَصَعُ
 سَاكِنُو الرِّيحِ إِذَا طَارَ الْقَرْعُ
 يُرَابُ الشَّعْبِ إِذَا الشَّعْبُ انْصَدَعُ
 فِي قَدِيمِ الدَّهْرِ لَيْسَتْ بِالْبِدَعِ
 وَإِذَا حَمَلَتْ ذَا الشِّفِّ ظَلَعُ
 وَسَرَاةُ الْأَصْلِ وَالنَّاسُ شَيْعُ
 مِنْ سُلَيْمَى فَمُقَوَادِي مُنْتَزَعُ
 جَانِبَ الْحِصْنِ وَحَلَّتْ بِالْقَرْعِ
 غَيْرَ إِمَامٍ إِذَا الطَّرْفُ هَجَعُ
 قَرَّتِ الْعَيْنُ وَطَابَ الْمُضْطَجَعُ
 وَحَدَا الْحَادِي بِهَا ثُمَّ أُنْدَفَعُ
 غَلِقَ إِثْرَ الْقَطِيبِ الْمُتَبَعُ
 فَوْقَ ذِيَالٍ بِخَدْيِهِ سَفَعُ
 وَعَلَى الْمُتَنِينِ لَوْ أَنَّ قَدْ سَطَعُ
 مِثْلَ مَا يَبْسُطُ فِي الْخَطْوِ الذَّرْعُ

- ٥٤- رَاعَهُ مِنْ طَيِّءٍ ذُو أَسْهُمْ
 ٥٥- فَرَاهُنَّ وَلَمَّا يَسْتَبِينَ
 ٥٦- ثُمَّ وَلَّى وَجَنَابَانَ لَهُ
 ٥٧- فَتَرَاهُنَّ عَلَى مُهَلَّتِهِ
 ٥٨- ذَانِيَاتٍ مَا تَلْبَسْنَ بِهِ
 ٥٩- يُرْهَبُ الشَّدَّ إِذَا أَرْهَقْنَهُ
 ٦٠- سَاكِنُ الْقَفْرِ أَخُو دَوِيَّةٍ
 ٦١- كَتَبَ الرَّحْمَنُ، وَالْحَمْدُ لَهُ،
 ٦٢- وَإِبَاءٌ لِلدَّيَّيَاتِ إِذَا
 ٦٣- وَبِنَاءٌ لِلْمَعَالِي إِنْ مَأَ
 ٦٤- نَعَمْ لِلَّهِ فِينَا رَبَّهَا
 ٦٥- كَيْفَ بِأَسْتَفْرَارٍ حُرٍّ شَاحِطٍ
 ٦٦- لَا يُرِيدُ الدَّهْرَ عَنْهَا حَوْلًا
 ٦٧- رَبِّ مَنْ أَنْضَجْتُ غَيْظًا قَلْبُهُ
 ٦٨- وَيَرَانِي كَالشَّجَا فِي حَلْقِهِ
 ٦٩- مُزِيدٌ يَحْطُرُ مَا لَمْ يَرْنِي
 ٧٠- قَدْ كَفَانِي اللَّهُ مَا فِي نَفْسِهِ
 ٧١- بَيْسَ مَا يَجْمَعُ أَنْ يَغْتَابِنِي
 ٧٢- لَمْ يَضُرْنِي غَيْرَ أَنْ يَحْسُدْنِي
 ٧٣- وَيُحْيِيْنِي إِذَا لَاقَيْتُهُ
 ٧٤- مُسْتَسِرُّ الشَّنِّ لَوْ يَفْقِدُنِي
 ٧٥- سَاءَ مَا ظَنُّوا وَقَدْ أَبْلَيْتُهُمْ
 ٧٦- صَاحِبُ الْمِثْرَةِ لَا يَسْأَلُهَا
 ٧٧- أَصْفَعُ النَّاسِ بِرَجْمٍ صَائِبٍ
 ٧٨- فَارِغُ السَّوْطِ فَمَا يَجْهَدُنِي
 ٧٩- كَيْفَ يَزْجُونَ سِقَاطِي بَعْدَ مَا
 ٨٠- وَرِثَ الْبَغْضَةَ عَنْ آبَائِهِ
 ٨١- فَسَعَى مَسْعَاهُمْ فِي قَوْمِهِ
 وَضِرَاءٌ كُنَّ يُبْلِسِينَ الشَّرْعَ
 وَكِلَابُ الصَّيْدِ فِيهِنَّ جَشَعُ
 مِنْ غَبَارٍ أَكْذَرِيٍّ وَاتَّدَعُ
 يَحْتَلِينَ الْأَرْضَ وَالشَّاهُ يَلْعُ
 وَاثِقَاتٍ بِدِمَاءٍ إِنْ رَجَعُ
 وَإِذَا بَرَزَ مِنْهُمْ رَبْعُ
 فَإِذَا مَا آنَسَ الصَّوْتِ أَمْصَعُ
 سَعَةَ الْأَخْلَاقِ فِينَا وَالضَّلْعُ
 أُعْطِيَ الْمَكْثُورُ ضِيْمًا فَكَنَعُ
 يَرْفَعُ اللَّهُ وَمَنْ شَاءَ وَضَعُ
 وَصْنِيْعُ اللَّهِ وَاللَّهُ صَنَعُ
 بِلَادٍ لَيْسَ فِيهَا مُتَسَعُ
 جُرْعَ الْمَوْتِ، وَلِلْمَوْتِ جُرْعُ
 قَدْ تَمَنَّى لِي مَوْتًا لَمْ يُطْعُ
 عَسِرًا مَخْرُجُهُ مَا يُنْتَزَعُ
 فَإِذَا أَسْمَعْتُهُ صَوْتِي أَنْقَمَ
 وَمَتَى مَا يَكْفِ شَيْئًا لَا يُضْعُ
 مَطْعَمٌ وَحْمٌ وَدَاءٌ يُدْرَعُ
 فَهَوَ يَزْقُو مِثْلَ مَا يَزْقُو الضُّوعُ
 وَإِذَا يَحْلُو لَهُ لَحْمِي رَنَعُ
 لَبَدًا مِنْهُ ذُبَابٌ فَتَبَعُ
 عِنْدَ غَايَاتِ الْمَدَى كَيْفَ أَفْعُ
 يُوقِدُ النَّارَ إِذَا الشَّرُّ سَطَعَ
 لَيْسَ بِالطَّيْشِ وَلَا بِالْمُرْتَجَعُ
 ثَلَبٌ عَوْدٌ وَلَا شَحْتُ ضَرْعُ
 لَاحَ فِي الرَّأْسِ بَيَاضٌ وَصَلَعُ
 حَافِظُ الْعَقْلِ لِمَا كَانَ اسْتَمَعَ
 ثُمَّ لَمْ يَظْفَرْ وَلَا عَجَزًا وَدَعُ

- ٨٢- زَرَعَ الدَّاءَ وَلَمْ يُدْرِكْ بِهِ
 ٨٣- مُفْعِيًا يَزْدِي صَفَاءً لَمْ تُرْمَ
 ٨٤- مَعْقِلٌ يَأْمُنُ مَنْ كَانَ بِهِ
 ٨٥- غَلَبَتْ عَادًا وَمَنْ بَعْدَهُمْ
 ٨٦- لَا يَرَاهَا النَّاسُ إِلَّا فَوْقَهُمْ
 ٨٧- وَهُوَ يَرْمِيهَا وَلَنْ يَبْلُغَهَا
 ٨٨- كَمِهَتْ عَيْنَاهُ حَتَّى أَبْيَضَتَا
 ٨٩- إِذْ رَأَى أَنْ لَمْ يَضِرْهَا جَهْدُهُ
 ٩٠- تَعْضِبُ الْقُرْنَ إِذَا نَاطَحَهَا
 ٩١- وَإِذَا مَا رَامَهَا أَعْيَا بِهِ
 ٩٢- وَعَدُوٌّ جَاهِدٍ نَاضَلْتُهُ
 ٩٣- فَتَسَاقَيْنَا بِمُرٍّ نَاقِعٍ
 ٩٤- وَأَرْتَمَيْنَا وَالْأَعَادِي شُهْدٌ
 ٩٥- بِنَبَالٍ كُلُّهَا مَذْرُوبَةٌ
 ٩٦- خَرَجْتُ عَنْ بَعْضَةِ بَيْتَةٍ
 ٩٧- وَتَحَارَضْنَا وَقَالُوا إِنَّمَا
 ٩٨- ثُمَّ وَلَّى وَهُوَ لَا يَحْمِي أَسْتَهُ
 ٩٩- سَاجِدَ الْمَنْخَرِ لَا يَرْفَعُهُ
 ١٠٠- فَرَّ مَيِّ هَارِبًا شَيْطَانُهُ
 ١٠١- فَرَّ مَيِّ حِينَ لَا يَنْفَعُهُ
 ١٠٢- وَرَأَى مَيِّ مَقَامًا صَادِقًا
 ١٠٣- وَلِسَانًا صَيَّرَفِيًّا صَارِمًا
 ١٠٤- وَأَتَانِي صَاحِبٌ دُوْ غَيْثٍ
 ١٠٥- قَالَ لَبَيْكَ، وَمَا اسْتَصْرَحْتُهُ
 ١٠٦- دُوْ غُـبَابٍ زَبَدٍ آذِيهِ
 ١٠٧- زَعْرَبْتِي مُسْتَعِزٌّ بَحْرُهُ
 ١٠٨- هَلْ سُوَيْدٌ غَيْرُ لَيْثٍ خَادِرٍ
- تَرَةً فَاتَتْ وَلَا وَهْيًا رَفَعَ
 فِي ذُرَى أَعْيَطَ وَغَرِ الْمُطَّلَعُ
 غَلَبَتْ مَنْ قَبْلَهُ أَنْ تُفْتَلَعُ
 فَأَبَتْ بَعْدُ فَلَيْسَتْ تُتَضَعُ
 فَهِيَ تَأْتِي كَيْفَ شَاءَتْ وَتَدَعُ
 رِعَةَ الْجَاهِلِ يَرْضَى مَا صَنَعَ
 فَهُوَ يَلْحَى نَفْسَهُ لَمَّا نَزَعَ
 وَرَأَى خَلْقَاءَ مَا فِيهَا طَمَعُ
 وَإِذَا صَابَ بِهَا الْمِرْدَى أَنْجَزَعَ
 قِلَّةُ الْعُدَّةِ قَدَمًا وَالْجَدَعُ
 فِي تَرَاحِي الدَّهْرِ عَنْكُمْ وَالْجُمُعُ
 فِي مَقَامٍ لَيْسَ يَنْبِيهِ الْوَرَعُ
 بِنَبَالٍ ذَاتِ سُمٍّ قَدْ نَقَعَ
 لَمْ يُطِيقْ صَنْعَتَهَا إِلَّا صَنَعَ
 فِي شَبَابِ الدَّهْرِ وَالْدَّهْرُ جَذَعُ
 يَنْصُرُ الْأَقْوَامَ مَنْ كَانَ ضَرَعُ
 طَائِرُ الْإِثْرَافِ عَنْهُ قَدْ وَقَعَ
 خَاشِعَ الطَّرْفِ أَصَمَّ الْمُسْتَمَعُ
 حَيْثُ لَا يُعْطَى وَلَا شَيْئًا مَنَعَ
 مُوقَرَ الظَّهْرِ ذَلِيلَ الْمُتَضَعُ
 ثَابِتَ الْمُؤْطِنِ كَتَّامَ الْوَجَعُ
 كَحُسَامِ السَّيْفِ مَا مَسَّ قَطَعَ
 زَفْيَانٌ عِنْدَ انْفِـسَادِ الْقُرْعُ
 حَاقِرًا لِلنَّاسِ قَوَالَ الْقَدْعُ
 حَمِطُ التَّيَّارِ يَرْمِي بِالْقَلْعُ
 لَيْسَ لِلْمَـَاهِرِ فِيهِ مُطَّلَعُ
 ثَبَدَتْ أَرْضٌ عَلَيْهِ فَانْتَجَعُ

No.40 訳

- 1- ラービアは愛の絆を我らのほうに伸ばした。彼女の絆が広げられている限り、我らはそれに結びつく¹⁾。
- 2- 彼女は自由人で、(笑うと) きれいに並んだ歯を見せるが、それは、曇間の太陽の光のように辺りを照らしている。
- 3- 彼女は歯をかぐわしいアラーク²⁾の柔らかな緑の枝で作った歯ブラシで磨き、真っ白にしていた。
- 4- 歯並びは白く、その味わいは美味である。彼女の唾液は、(他の者の) 唾液が変化し悪臭を放つようになっていたりするときでも、甘い。
- 5- 彼女は鏡に真っ白な顔を映させるが、まるで、晴天に昇る初日の光のように輝いている。
- 6- 顔色は清らか、眼は静かで、両まぶたにはクフルが塗られ、目の内側に、赤いただれなどはない。
- 7- 彼女の前髪は豊かで、その中に彼女は潤沢な麝香の香りを沁みこませていた³⁾。
- 8- 私を (夜) 訪れる (彼女の) 幻は、慕情を引き起こした。その幻には、内気な恋人の恥じらいが現れていた。
- 9- 恋人の幻は遠くから我らの鞍のところへ、夜、恐れることなく、茂みの群れを横切ってやって来た。
- 10- 親しい恋人 (の幻) が私を訪ねてくると、私は眠りを妨げられ、眠気も遠慮する。
- 11- 愛とはかくの如し。なんと大胆なものよ。恐怖に立ち向かい、制止する者の言を聞かない。
- 12- それゆえ、私は夜、眠らずに過ごし、わが目で、昇る星を見上げていた。
- 13- 私は「夜のひと時が去った」と言ったが、夜の最初は去るが、やがて、戻ってくる⁴⁾。
- 14- 夜は (ラクダが) びっこを引くように、動きの遅い星屑を引っ張っている。それに、続く星の群れも動きが遅い⁵⁾。
- 15- 星の歩みが遅いのにもかかわらず、白い朝の明かりが、それを進ませ、(夜の) 暗い色は消えて行った⁶⁾。
- 16- 私から青春の生々しさと全盛期が過ぎた後になって、サルマーへの愛が私を呼び戻した。
- 17- 彼女は私を心身ともに恋に病ませ、いまだ、治してくれない。それゆえ、私の心はちちに乱れている。
- 18- 彼女は抗えぬ魅力で私を呼び寄せた。すなわち、彼女は山頂から、思いのまま、前足の白い野生の雄ヤギを下山させたのである。
- 19- 彼女は話し相手には、美しい言葉で語りかけるが、その言葉以外のものを求められ

1) ラービア (Rabī'a 「4番目の娘」) は16行に出てくる恋人、サルマー (Salmā) の異名。

2) アラーク (arāk) はインド、ペルシャ、アラビアに分布している灌木。この他、歯ブラシ用には *bashām*, *darw*, および *ishil* などの樹の枝が使われた。

3) *riḥu* と主格で読むと、「麝香の香りがしみ込んだ」となる。対格で読むと、動詞 *ghallala* の目的語になる。しかし、この動詞が目的語を2つとる例は、辞書にない。

4) イムル・アルカイスのムアッラカ45「夜が背伸びし、臀部を広げ、胸元が遠退いたとき……」と同工異曲で、夜を幾つかに区分してそれらが次々に去り、また、戻ると表現している。

5) 夜がなかなか明けない様を言ったもの。

6) *al-lawn* 「色」とは「夜の色」のこと。

- ると、聞いてはくれない⁷⁾。
- 20-我らは幾たび遠隔の地から、蜃気楼が輝いている中、サルマーを訪ねるため、荒野を横断したことだろう。
- 21-肉が煮られるほどの熱風の中でのことだが、そこでは、旅人は強烈な日射の一撃を受けるだろう。
- 22-私は彼女を訪ねるために、断固とした決意と十分な注意を払いながら、敵を踏みつけて旅した。
- 23-多くの砂漠の周辺は白く輝き、(風で) 飛散した千切れ雲のように、かなたはかすんでいる。
- 24-蜃気楼は、日が高くなると、山々や荒野の上を泳いでいく⁸⁾。
- 25-我らは道しるべもない(危険な) 荒野を、活力あふれる、四肢(または、蹄)が頑強な馬に乗って旅した。
- 26-馬は、遠くに射られる矢のように、すらりとしており、俊足で、夜旅にも良く耐え、先頭を進む。また、皮膚にただれを起こし、刺青のごとき跡を残すような皮紐で腹帯を締めてはいない⁹⁾。
- 27-あなたは馬が疾風のように突進する姿を見るであろう。鍛冶屋が作った蹄鉄をはめているので、石を踏んでも負傷しない。
- 28-馬は夜になっても、我らを乗せて突き進む。まるで、灰色のヤマウズラが、朝、水場に急行するように、すばやい¹⁰⁾。
- 29-馬は急いで少量の水を飲むと、牧草が求められる土地へと移動して行った。
- 30-バクル族には財産がある。彼らには、相談を直接受ける場や話を聞く場がある¹¹⁾。
- 31-彼らは、乞われれば、手を広げて与え、誰かに役立つのであれば、有益なものを与える¹²⁾。
- 32-彼らは卑劣なことを急いでしたり、悪意に満ちた苛立ちを表わしたりする性質を全く持っていない。
- 33-我らは義務を果たすのに忍耐強く、これに倦むことはない。また、難事にあたり、我らの中には、軟弱な者はいない¹³⁾。
- 34-北風が吹きさすぶとき、彼らは大鍋を肉で満たして食べさせる。よって、彼らの元にあっては飢えることはない。
- 35-なんと多くの水槽のような皿に、太ったラクダの肉が盛られていたことだろう。
- 36-彼らに隣人保護を受ける者は、彼らに裏切られる恐れはなく、名誉を汚される心配もない。
- 37-彼らは、他の者が惜しむものでも気前よく与え、貪欲な悪行から、自らを隔ててい

7) 彼女の貞節さを表す。

8) *ʿa-lām* (単数 *ʿalam*) は、「山々のこと」と解説にあるが、平坦な砂漠に言及しているので、標識のことかも知れない。

9) テキストのように *musnafāt* と読めば「ラクダの腹帯」(< *sināf*)。これはラクダのみに用い、馬には用いない。*musnifāt* 「先に立って進む」と読むべきだ、とするアフマドの説に従う。

10) No.26の詩14行参照。

11) または、「近くの者には直接会い、遠くの者には伝言を聞く場所がある」。

12) *shayʾ* 「物」が *ʾaḥad* 「誰か」の意味で用いられている。コーラン61章11節に同じ例がある。

13) 32行までと比べ、動詞の人称が変化している。これは、61行以下のものがここに紛れ込んだものの。61行以下には人称の乱れが伺える。

る。

- 38- 彼らは、顔が美しく肌は白く、首領の貫禄を備えており、苛立ちがこうじても、沈着である。
- 39- 彼らは、他の者と比較して、気質が重厚で、困難が激すれば、勇敢に立ち向かう。
- 40- 彼らはライオンで、その危害は恐れられている。千切れ雲が飛ぶように（人々が右往左往するとき）彼らは冷静で動じない。
- 41- 彼らによって、敵は致命的打撃を受ける。また部族が分裂するとき、彼らによって、分裂は繕われる。
- 42- これらは、父祖伝来の良く知られた習わしであり、彼らが新たに発明したものではない。
- 43- 彼らは、重荷を背負わされてもびっこを引かない。だが、そのような重荷を富者に背負わすと、びっこを引くであろう。
- 44- 人々は、さまざまな集団に分かれているが、彼らは、同等の善人や由緒ある血筋の人々を親友としている¹⁴⁾。
- 45- スライマーの幻が落ち着かず、私の目を眠らせない。そのため、私の心は乱れてしまった¹⁵⁾。
- 46- 私の家族は、彼女を求めることが出来ないアルハドルのそばに住み、彼女はアルファラウに住んでいた¹⁶⁾。
- 47- 私の心は彼女に寄せられているが、逢うことは出来ない。彼女に近寄るのは、ただ、目を開けて、夜、眠るときのみ¹⁷⁾。
- 48- 彼女は、アットアーム¹⁸⁾の真珠のようだ。あなたが彼女と肌を合わせると、目元が涼やかとなり、彼女と床をともにすれば甘味だ。
- 49- 彼女は、ある朝、出立する決意を固め、ラクダの御者が彼女を乗せて旅立って行った。
- 50- 高潔な男（私）が、彼女に鉄枷（かせ）でつながれた奴隷のように、彼女の一行のあとについて行く。
- 51- まるで、私は、蜃気楼が午前、平原を走る頃に、両頬に黒い斑点のある、尾が長い野生の雄牛に乗っているかのようであった。
- 52- 牛の両頬は錦織模様で縁取られており、背には白い色が輝いていた。
- 53- 牛は、あなたがけしかけると、子牛が大またで歩くように、歩幅をひろげる¹⁹⁾。
- 54- タイ族の獵師と、弓の弦の音を聞くと獲物に飛び掛っていく、鍛えられた獵犬が、牛を驚かせた。
- 55- 野牛は、はっきりとはではないが、獵犬を見た。獵犬どもは獲物に渴望していたのである。
- 56- 野牛は向きを変えて、穏やかな歩みで逃げた。その両側に濁った色の砂埃が上がった。

14) 「詩人のバクル族は優れた人々とのみつきあっている」の意。

15) ここから、別の詩が始まっている。

16) テキストには al-Hiṣn となっているが、解説では al-Haḍr が正しいとしている。古代パルチアの城砦があったハトラ (Haṭra) のこと。モスル (アルマウシル al-Mawṣil) の南西砂漠、サルサル溪谷 (Wādī Tharthar) にある遺構。アルファラウ (al-Faraʿ) はクーファとバスラの中間の地名。

17) 「彼女には夢の中でしか会えない」の意。

18) アットアーム (al-Tuʾām) はオマーンのスハール (Ṣuḥār) の海岸あたりの地名と考えられる。

19) 他の詩から紛れ込んだ1行と思われる。

- 57- あなたは、野牛がゆっくり逃げて行き、一向に速度をあげないのに、獵犬が草を爪で引っ掻きながら、追って行くのを見るだろう。
- 58- 獵犬は野牛に追いついても、襲いかかりはしない。野牛が反転して襲えば、角で突かれ血を流すのを知っているからである²⁰⁾。
- 59- 獵犬が野牛を追い立てると、野牛は逃げ足を早めるが、獵犬と離れると、走るのをやめてしまう。
- 60- 野牛は砂漠の住民であり、広大な荒野の兄弟である。音を感じると、聞き耳をたてる。
- 61- 慈愛厚き神 —— 神に讃えあれ —— は我らに広大な度量と強大な忍耐力を授けると定めたもうた。
- 62- また、人数で劣る者たちが圧迫され屈服する際に、あらゆる不品行を拒絶する性質を我らに授けると定めたもうた。
- 63- また、輝かしい功績を愛(め)で、我らに高楼を建てるに定めたもうた。神のみが高めたまい、意のままに低めたもう。
- 64- 神の祝福は我らの中に行き渡り、神はそれを成就したもう。これは、神の御業であり、まことに、神は御業に長けたお方である。
- 65- 国許からはるかに離れ、自由に活動する余地のない異国に、自由人がいかにして住み付くことが出来ようか。
- 66- 彼にはこの地から離れる工夫がつかない。(ここに留まることは) 死に飲み込まれるほどつらい。まことに、死は飲み込むべきものである²¹⁾。
- 67- なんと多くの男の胸に、私は怒りを募らせたことだろう。彼は私の死を望んだが、願いは達せられなかった。
- 68- 彼は私を、まるで、喉に刺さった骨のように見なしているが、取り出すのは難しく、引き抜かれなかった。
- 69- 彼は、私が見えないところでは、白い泡を出している激したラクダのように、威張っているが、私の声を聞くと、身を縮めてしまう。
- 70- 彼が心の中に隠している悪巧みに対しては、私は神だけで足りる。神が充足して下されば、失われるものはない。
- 71- 彼が私に陰口をきこうと寄せ集めたものは、なんと悪いものよ。即ち、消化しがたい食べ物と、衣のように彼を覆う病である。
- 72- 彼は、私を妬んでいるが、危害を及ぼしてはいない。すなわち、彼は雄の梟が叫ぶように、叫ぶだけの弱虫である。
- 73- 私が彼と出会うと、彼は私の長寿を願うが、彼一人だけになると、私の肉を食る。
- 74- 彼は、(私の前では) 憎しみを隠しているが、私がいなくなると、彼の害悪が表に現れる²²⁾。
- 75- 彼らはなんと悪い考えを抱いていることよ。私は彼らに遠くの目的地に、どのようにすれば、達せられるか明示しておいたのだが。
- 76- 敵意を抱いている者は、敵意に倦むことはない。悪意が広がれば、敵意に火をつける。
- 77- 私は人々の頭を、的に当たる石で打つ。それは軽い打撃でもなければ、繰り返され

20) 57行の al-shātu「羊、カモシカ」は雄の野牛のこと。58行の動詞は意味に合わせ男性単数。

21) Lyall 校訂注釈書では64行が、カイロ版の66行相当に配置されており、訳はカイロ版によった。いずれにせよ、64行と66行は他の詩から紛れ込んだものである。

22) 「梟」は力のない声だけの存在として捉えられている。

るものでもない²³⁾。

78- 私には、(ラクダを駆けさせるための) 鞭はいらない。年老いたよぼよぼのラクダにも、細身の若いラクダにも、悩まされはしない²⁴⁾。

79- 私の頭に白髪とはげが輝くようになっている今になって、彼らはいかにして私を没落させることが望めようか。

80- 彼は、私への憎しみを父祖より相続し、彼らから聞いたところを心にとどめている。

81- 彼は、部族の中で父祖が努めたとおりのことを行うが、望みをかなえることもなく、これと決別する力も持ち合わせていない。

82- 彼は (父祖と同じように子供たちに) 病氣²⁵⁾を植えつける。彼自身はその病で私に復讐することが出来ず、(私から受けた傷の) 裂け目の手当ても出来なかった。

83- (私を妬んでいる) 彼はうずくまったままで、近寄りがたい岩を打とうとするが、その岩は高い山の頂にあって、そこに到る道は険阻である²⁶⁾。

84- (山頂のこの岩は) 避難所で、ここに身を寄せる者は安全である。この岩は、彼より前に引き抜こうとした者全てを打ち負かした。

85- (その岩は) アード²⁷⁾の民に勝ち、彼らより後の世の者たちにも勝ち、服従を拒み、頭を下げさせられたことがない。

86- 人々は、その岩が彼らの上に聳えている姿のみをみる。岩は思いのまま取捨選択する。

87- 彼は、その岩を狙って石を投げるが、決して届かない。己のしたことに満足している愚か者である。

88- 彼は、生まれながらにして盲目で、両目は白い幕で覆われてしまい、無駄な行いを差し控えると、自身を責めた。

89- 何故なら、努力しても岩には危害を加えることができないと気づいたからである。あのすべすべした岩に登ろうとしても、無理と見たからである。

90- 彼がその岩を角で突けば、角が折れるであろう。また、岩に向かって石を投げれば、石は砕けるだろう。

91- 彼がその岩を攻略しようと望んだところで、古風で不足がちの装備と栄養失調が、彼を無力にする。

92- 長い時世のなかで、人々が集団をなしているとき、私はあなた方のために、なんと多くの難敵と戦ったことだろう。

93- 我らは互いに、臆病が無益な風刺合戦の場で、致命的な中傷の言葉を飲ませあったことだろう。

94- 我らは互いに中傷の言葉を投げあったが、敵は矢の毒 (言葉) が (彼らに) 注入されるのを目の当たりにしていた。

95- (風刺の) 矢は、ことごとく鋭く尖っているが、それが作れるのは、技巧に長けた職人のみである。

96- (風刺の) 矢は、時世の始まり、すなわち、時世が春を迎えた頃、明白な憎悪の念から射られたものだ。

23) *rajm* 「石を投げること」。「石」とは「中傷する言葉」の意。「繰り返していう必要がない」という部分は、一言で致命的打撃を与えるので、「返答の出来ない」と訳するのが良いかもしれない。

24) 「私」とは詩人のことで、彼は「由緒あるラクダ」、中傷する相手は「劣ったラクダ」としている。

25) 病氣とは詩人を憎む感情のこと。

26) 詩人は自らを頂上の岩にたとえ、相手の中傷も効果がないと自慢している。

27) アード (ʿAd) はコーランで言及されている古代の伝説上の民。

- 97-我らは互いに減ぼそうと努めた。すると、彼らは「人々が助けるのは弱者だ」と言った。
- 98-次いで彼は、尻を守ることなく、背を向けて逃げた。贅沢の鳥は彼より離れた所に落ちた。
- 99-彼は、鼻を地面にこすりつけたまま上げることが出来ず、目は伏せたままで、耳は聞こえなくなっていた²⁸⁾。
- 100-彼に (風刺をさせていた) シャイターンは、敗れて私の前から逃げ、もはや、彼を助けることも守ることも出来なくなった²⁹⁾。
- 101-逃げたところで、何の益もないようになって、負けた重荷を背負わされ、辱められ、哀れな姿で退散した。
- 102-彼は、私の勇敢に戦う態度と、揺ぎない論拠、および、苦痛を見せない忍耐力を見た。
- 103-私の弁舌の巧みさを見たのである。それは、まるで剣の刃のように鋭く、触れるものを切り裂く。
- 104-私のもとへ、物を補給する伴侶がやって来た。彼は皮袋の水がなくなると、速やかに水を運んでくる³⁰⁾。
- 105-彼は「ただ今参上」と言った。彼は人々に悪口雑言を吐くので、私は軽蔑して彼に支援を求めなかったのだが。
- 106-(シャイターン) は大波が打ち合う海のように、泡立ちぶつかり合い、大岩のような波を投げかける。
- 107-シャイターンの海は水量豊かで、克服することは出来ず、泳ぎの巧者も抜け出せない。
- 108-スワイドは、巣に潜伏しているライオンではないのか。その地の湿気が多ければ他の地へ餌を求めて移動するライオンのような男だ。

28) 風刺合戦に敗れてひれ伏す様。

29) シャイターンが詩人にとりついていて靈感を与え、詩人を喋らせると考えられていた。

30) 「詩が思い浮かばなくなると、シャイターンが次々に詩想をもたらす」の意。

— (41) アルアフナス・ブヌ・シハープ・アッタグリビー —

الأَخْنَسُ بْنُ شِهَابِ التَّغْلِبِيِّ

まえがき

本名アルアフナス・ブヌ・シハープ・ブヌ・シャリーク (al-ʿAkhnas b. Shihāb b. Shāriq)。この詩人は『歌の書』にも、『詩と詩人たちの書』にも項目がなく、詳細が不明である。『詩と詩人たちの書』p.180 のラビーア・ブヌ・マクルーム (No.38 の詩人) の項に本詩24行が引用されているが、「カイスが言った」とあるだけで、彼の名は挙げていない。なお、『ハマーサ詩集』p.720-720 には、彼をとりあげて本詩の14行分が (一部に語句の異同があるが) 載っている。

彼の名「アルアフナス」は「ライオン」の異称である。また、彼は Shāʿir al-ʿAṣā「アルアサーの詩人」と呼ばれているが、「アルアサー」は「杖」のことであって、彼の馬の名前とされている。

詩の内容から推して、この詩はイスラームよりかなり前、バクル族とタグリブ族がアラビア半島外に居を移した AD 550年ごろの作と考えられる。この詩の中には、多くの部族に関する地理的情報が述べられており、バクラーやヤークートなど地理学者も、本詩から多く引用している。この詩は、同じくタグリブ族の詩人アムル・ブヌ・クルスームのムアッラカより古いものであるが、タグリブ族を誇る精神には共通するものがある。

このように、本詩の主題はタグリブ族の賞揚であるが、同時に、当時の中央および北アラビアの古い伝承を伝えている。タグリブ族は預言者ムハンマドの頃にはキリスト教徒になっているが、この詩が作られた頃は多神教徒であったと考えられる。

詩人は序詩のあと、多くのアラブがそれぞれ拠点を持っていることに触れ、タグリブは拠点を持たない砂漠の住民で、出会う部族を征服するとし、部族の馬や軍団を自慢している。タウイール (*tawīl*) 調、27行。

(41) テキスト

وَقَالَ الْأَخْنَسُ بْنُ شِهَابِ التَّغْلِبِيِّ

- | | |
|--|---|
| ١ - لَابْنَةِ حِطَّانَ بْنِ عَوْفٍ مَنَازِلُ | كَمَا رَقَّشَ الْعُنْوَانُ فِي الرِّقِّ كَاتِبُ |
| ٢ - ظَلِلْتُ بِهَا أُعْرَى وَأُشْعَرُ سُحْنَةً | كَمَا أَعْتَادَ مَحْمُومًا بِخَيْبَرٍ صَالِبُ |
| ٣ - تَظَلُّ بِهَا رُبْدُ النَّعَامِ كَأَنَّهَا | إِمَاءٌ تُزَجَّى بِالْعَشِيِّ حَوَاطِبُ |

- ٤ - خَلِيلَايَ هَوَجَاءُ النَّجَاءِ شِمْلَةً
 ٥ - وَقَدْ عِشْتُ دَهْرًا وَالْعَوَاةُ صَحَابَتِي
 ٦ - رَفِيقًا لِمَنْ أَعْيَا وَقُلْدَ حَبْلُهُ
 ٧ - فَأَدَيْتُ عَنِّي مَا اسْتَعَرْتُ مِنَ الصَّبِي
 ٨ - لِكُلِّ أَنْاسٍ مِنْ مَعَدٍّ عِمَارَةً
 ٩ - لُكَيْزٍ لَهَا الْبَحْرَانِ وَالسَّيْفُ كُلُّهُ
 ١٠ - تَطَايَرُ عَنْ أَعْجَازِ حُوشٍ كَأَنَّهَا
 ١١ - وَبَكَرَتْ لَهَا ظَهْرُ الْعِرَاقِ وَإِنْ تَشَأْ
 ١٢ - وَصَارَتْ تَمِيمٌ بَيْنَ قُفٍّ وَرَمْلَةٍ
 ١٣ - وَكَلْبٌ لَهَا حَبْتُ فَرْمَلَةٍ عَالِجٍ
 ١٤ - وَعَسَّانٌ حَتَّى عِرْزُهُمْ فِي سَوَاهِمُ
 ١٥ - وَبَهْرَاءُ حَتَّى قَدْ عَلِمْنَا مَكَانَهُمْ
 ١٦ - وَغَارَتْ إِيَادٌ فِي السَّوَادِ وَدُونَهَا
 ١٧ - وَلَحْمٌ مُلُوكِ النَّاسِ يُجْبَى إِلَيْهِمْ
 ١٨ - وَنَحْنُ أَنْاسٌ لَا حِجَارَ بِأَرْضِنَا
 ١٩ - تَرَى زَائِدَاتِ الْحَيْلِ حَوْلَ بُيُوتِنَا
 ٢٠ - فَيُعْبَقْنَ أَخْلَابًا وَيُصْبَحْنَ مِثْلَهَا
 ٢١ - فَوَارِسُهَا مِنْ تَغْلِبِ ابْنَةِ وَاثِلٍ
 ٢٢ - هُمْ يَضْرِبُونَ الْكَبْشَ يَبْرِقُ بَيْضُهُ
 ٢٣ - بِجَأَوَاءٍ يَنْفَى وَرُدَّهَا سَرَعَانَهَا
 ٢٤ - وَإِنْ قَصُرَتْ أَسْيَافُنَا كَانَ وَضْلُهَا
 ٢٥ - فَلِلَّهِ قَوْمٌ مِثْلُ قَوْمِي سُوقَةً
 ٢٦ - أَرَى كُلَّ قَوْمٍ يَنْظُرُونَ إِلَيْهِمْ
 ٢٧ - أَرَى كُلَّ قَوْمٍ قَارَبُوا قَيْدَ فَحْلِهِمْ
- وَدُو شُطْبٍ لَا يَجْتَوِيهِ الْمُصَاحِبُ
 أَوْلَيْكَ خُلَصَانِي الَّذِينَ أَصَاحِبُ
 وَخَادِرَ جَزَاهُ الصَّدِيقُ الْأَقَارِبُ
 وَلِلْمَالِ عِنْدِي الْيَوْمَ رَاعٍ وَكَاسِبُ
 عَرُوضٍ إِلَيْهَا يَلْجَأُونَ وَجَانِبُ
 وَإِنْ يَأْتِيهَا بَأْسٌ مِنَ الْهِنْدِ كَارِبُ
 جَهَامٍ أَرَاكَ مَاءَهُ فَهُوَ آتِبُ
 يَحُلُّ دُونَهَا مِنَ الْيَمَامَةِ حَاجِبُ
 لَهَا مِنْ حِبَالٍ مُنْتَأَى وَمَذَاهِبُ
 إِلَى الْحَرَّةِ الرَّجْلَاءِ حَيْثُ تُحَارِبُ
 يُجَالِدُ عَنْهُمْ مِقْنَبٌ وَكَتَائِبُ
 لَهُمْ شَرَكٌ حَوْلَ الرُّصَافَةِ لَا حِبُ
 بَرَازِيْقُ عُجْمٍ تَبْتَغِي مَنْ تُضَارِبُ
 إِذَا قَالَ مِنْهُمْ قَائِلٌ فَهُوَ وَاجِبُ
 مَعَ الْعَيْثِ مَا تُلْقَى وَمَنْ هُوَ غَالِبُ
 كِمَعَزَى الْحِجَارِ أَعَجَزَتْهَا الزَّرَائِبُ
 فَهِنَّ مِنَ التَّعْدَاءِ قُبُّ شَوَازِبُ
 حُمَاءُ كُمَاءٍ لَيْسَ فِيهَا أَشَائِبُ
 عَلَى وَجْهِهِ مِنَ الدِّمَاءِ سَبَائِبُ
 كَأَنَّ وَضِيحَ الْبَيْضِ فِيهَا الْكَوَكِبُ
 خُطَانَا إِلَى الْقَوْمِ الَّذِينَ نُضَارِبُ
 إِذَا اجْتَمَعَتْ عِنْدَ الْمُلُوكِ الْعَصَائِبُ
 وَتَقْصُرُ عَمَّا يَفْعَلُونَ الدَّوَائِبُ
 وَنَحْنُ خَلَعْنَا قَيْدَهُ فَهُوَ سَارِبُ

No.41 訳

- 1- ヒッターン・ブヌ・アウフの娘は書き手が書物の表紙を飾る (文字) 線のような住居跡を残している¹⁾。
- 2- 私は震えと暑気に襲われながら、終日、そこに留まった。まるで、ハイバル²⁾で熱病患者を酷暑が襲っているような姿であった。
- 3- 廃墟では灰色のダチョウが一日中、餌を食べているが、それは、薪集めの女が夕方家路へと追われている姿を思わせた³⁾。
- 4- 私の友は2つあった。すなわち、俊足軽快な雌ラクダと、持ち主が嫌気を起こさない、筋が刻まれた剣である。
- 5- 私は迷える者たちを友として、時を過ごした。彼らは、私が付き合ったまことの友であった⁴⁾。
- 6- 仲間の1人は、(彼の放蕩ぶりを責める) 人を疲れさせ、追放された。近親の友人たちも彼の危害を警戒した⁵⁾。
- 7- 私は、若気のいたりで働いた数々の (不品行の) 借りを、(年を取って) 返済し、今日では財産を良く見張り、増やそうとしている⁶⁾。
- 8- マアッドの人たち各々には、よって立つ拠点⁷⁾がある。すなわち、(まさかのときに) 避難する安全な土地がある。
- 9- ルカイズ族は、2つの海の岬と海岸一帯を拠点としているが、もし、インドから難儀な脅威が追れば⁸⁾、
- 10- 彼らは、よく飼いならしていないラクダの尻に乗って、雨を降らして身軽になった雲が帰路を急ぐように、(高地に) 飛び急ぎ避難するであろう⁹⁾。
- 11- イラクの平原はバクル族のもので、彼らが望めば、アルヤマーマの地から (ハニーファ族が) 守り手となって、彼らを敵から守るであろう¹⁰⁾。

-
- 1) 住居跡を文字線に比するのはよく用いられる手法。*riqq* は書材として使われた「薄皮」。
 - 2) ハイバル (*Khaybar*) はタイマーの南、メデイナの北東に位置するオアシスの町で、水が地表に出ている、蚊が多く熱病にかかりやすい土地。ベドウィンはこのような土地には長居を避ける。
 - 3) 薪集めをして、疲れのため、ゆっくりした歩調で帰る女奴隷が運んでいる薪の束をダチョウの羽根の塊りに譬えたもの。
 - 4) タラファのムアッラカ53行。「私は塵の子ら (貧乏人) たちは、私をいとわないことを知った」と一脈通じる。
 - 5) *qullida ḥabla-hu* 「手綱を首に乘せ自由にされた」とはラクダに使われる表現であるが「部族に耐え難い行為をした成員を追放した」の意味にも用いられる。追放された者 (*khalīr*) とされ、スウルク (野盗) となるか他部族に庇護されるか、いずれかになる。ジャーヒリーヤ時代の詩人は、このような人物を仲間にする度量をよく自慢している。
 - 6) 若い頃の愚行を若気から借りたものとし、これを止める分別を持つことによって、免罪を求めている。
 - 7) *‘imāratin* と属格で読むと、人々と同格で「部族」をさす。主格で読むと「よって立つ拠点」つまり、アルード (*‘Arūd*) をさすことになる。後者によって訳した。
 - 8) ルカイズ (No.28 「まえがき」参照)。アルバフラインは今日のカタールにある岬のことで、バハレーンとは違う地と考えられる。インドからの脅威とは、古代のペルシャ湾の通商関係を反映したものであろう。
 - 9) 前置詞 *‘an* はアフマドの伝える *‘alā* が妥当。9行目の *‘in* (条件詞) の主節となっている10行目の動詞 *taṭāyara* 「飛散する」には少し疑問がある。
 - 10) イラクのユーフラテス沿いの平原がバクル族の土地と決まったのは、アルムンジル3世が、ズー・マジャーズの和平協定で調停したことによる。これは、525-530年ごろのことと推定されて

- 12- タミーム族は、ごつごつした岩の多い高地と砂漠の間の土地を領有し、遠隔の砂漠の大部分と多くの道を押えていて (安全だ) ¹¹⁾。
- 13- カルブ族はハプトとアーリジュ砂漠から火山岩が覆う地帯を領域として、(これを守るために) 戦う ¹²⁾。
- 14- ガッサーンは、その威光が彼ら以外の者におよぶ (王者) で、騎兵隊や (ビザンツの) 分遣隊が彼らのために戦う ¹³⁾。
- 15- バフラーウは我らが彼らの地位を良く知っている部族で、アッルサーファ周辺に通じる街道を保持している ¹⁴⁾。
- 16- イヤード族はサワード (イラクのユーフラテス中流域) に入って住んだが、彼らの前にはベルシャの騎兵集団が対峙していて、戦う相手を求めている ¹⁵⁾。
- 17- ラフムは王者らで、税は彼らの元へ徴収される。彼らの誰かが命じれば、それは義務として服さねばならぬ ¹⁶⁾。
- 18- 我らは、我らの土地に避難所を1つも持たない砂漠の民だ。雨が降る土地を訪ねそこで出会った住民を負かし、征服者になる。
- 19- あなたは、我らのテントの周りに放牧されている馬が周辺にいるのを見るであろう。それらは、まるでアルヒジャーズのヤギのようで、囲いに入れるにしては、数が多いすぎるのである。
- 20- 馬は、夕方にも朝方にも等しくミルクが飲まされ、よく走りまわっているので、よく引き締まり細身となっている。

いる。その結果、兄弟部族のタグリブとの長年の抗争 (「アルバスースの戦い」と呼ばれている) に終止符が打たれた。その後、バクル族は、シリアのディヤール・バクルのあたりまで領域を広げた。にもかかわらず、アルヤマーマの山岳地帯のハニーファ族と親密な関係を持っていた。ここで、*hājib* 「守り手」とは、ハニーファ族をさす。

- 11) タミーム族は多くの支族を持っていた。まず、ベルシャ湾岸のアブド・カイスの領域の北側からシャット・アルアラブ河に至る土地、そこから内陸のアルカシームに至る通路、ウナイザおよびハイドからハーイルに至る通路、さらには、アルヤマーマの山岳地の麓まで勢力を張っていた。つまり、「砂漠の大部分と岩の多い高地」というのは、以上をさす。
- 12) カルブ族は、大部族クダア系の中核をなす部族である。彼らは今日のワーディー・シルハーンからジャウフを結ぶオアシス地帯に住んでいた。この地帯は低地で可耕地が多く、ワーディー・アルクラールとかドゥーマト・アルジャンダルと呼ばれていた。アーリジュはジャウフとハーイルの間に広がる砂丘地帯で、アジャアの北西辺にあり、タイ族の山岳の北辺に沿っていた。アルハッラ・アッラジュラーアは、ハウラーンとラジャウの間の火山岩地帯と思われる。ワーディー・シルハーンとダマスカスの中間にある。
- 13) ガッサーンはもともと水場の名称であったが、ここに移住した南アラブのマージン・ブヌ・アルアズド・ブヌ・アルガウス (*Māzin b. al-ʿAzd b. al-Ghawth*) の名称となり、やがて、ジャフナ家が王族となったと言われている。キリスト教徒となってビザンツの緩衝国家となり、ラフム朝に対抗した。
- 14) バフラーウ (*Bahrāʾ*) はクダア系の部族で、東シリアのユーフラテス地域に早くから移住し、ヒムス (*Emessa*) を本拠として、キリスト教徒になった。アッルサーファ (*al-Ruṣāfa*) はラッカ近くのユーフラテス沿いの町で、彼らの移住先。当初、この部族はラフム朝の支配下に置かれていたが、やがて、ビザンツ領内に移動した。イスラーム初期のムウタの戦いでは、ビザンツ側に味方して抵抗したが、やがてシリアがイスラームに征服されると、イスラームに改宗した。
- 15) イヤード族は、しばしばサワードの地を荒らしていたためタグリブ族のマーリク・ブヌ・ハーリサとベルシャ軍4,000騎に征服され、壊滅的打撃を受けたと言われており、ベルシャ軍と対峙するほどの有力部族であったとは考えられない。また、彼らがサワードの地に住んでいたというのも疑わしいが、詩人は彼らが征服されるよりも以前のことに言及しているのかも知れない。
- 16) ラフム朝については No.9, 40行、No.12, 14行を参照。

- 21- これらの馬の騎士はワーイル族の子¹⁷⁾タグリブ族の男たちで、勇気を秘めた防護者であり、混血の烏合の衆は皆無である。
- 22- 彼らは、ぴかりと光る鉄兜を被った敵将を切りつけ、そのため、彼の顔面から筋をなして血が流れる。
- 23- 彼らは大騎兵団をなし、先に水場に來た者は、遅れてきた者のために、(混雑を避けるため) 脇に退く。騎兵団のなかでは鉄兜が惑星のようにきらめいている。
- 24- 我らの劍が短くて敵に届かなければ、戦う敵に向かって踏み出し切りつける¹⁸⁾。
- 25- 人々が王侯の下に集うとき、臣下の部族の中で、わが部族はなんと抜きん出ていることだろう¹⁹⁾。
- 26- 私は、各部族がわが部族 (の偉大な功績に) 目を向けているのをみる。すなわち、他の部族の首領たちのなすところは、わが部族に、到底、及ばないのである。
- 27- 各部族は彼らの雄ラクダに枷をはめようとして近寄るのを私は見るが、我らは枷をはずして自由に移動させる²⁰⁾。

17) Taghliba (ʿi)bnat Wāʾil (ワーイルの娘タグリブ) の ʿibna 「娘」は、通常は ʿibn 「息子」が用いられるが、詩においては韻律を整える都合上、「娘」が用いられることがある。

18) ジャーヒリーヤ時代のこの詩人のこの1行を、多くのムハドリム詩人たちが借用している。『詩と詩人達』p.180では、これを最初に言ったのは、ラビーア・ブヌ・マクルームまたはカイス・ブヌ・アルハーティムだと誤っている。なお、借用した詩人は、Kaʿb b. Mālik al-ʿAnsārī, Qays b. al-Khaṭīm, Bashāma b. Ḥazn al-Nahshalī, Bashīr b. ʿAbd al-Raḥmān, Kaʿb b. Mālik など。

19) li-llāhi qawmun. 感嘆的表現で、「わが部族はなんと優れた部族か」の意。

20) この1行は18行のあとに配置すべきもの。雄ラクダに足かせをはめておかないと、雌ラクダを連れて遠くへ移動し、他部族に奪われる恐れがある。けれども、タグリブは強大であり、この部族の印がついているラクダを奪う者はいない、と誇っている。

—— (42) ジャービル・ブヌ・フナイイ・アッタグリビー ——

جَابِرُ بْنُ حُنَيِّ التَّغْلِبِيِّ

まえがき

本名ジャービル・ブヌ・フナイイ・ブヌ・ハーリサ (Jābir b. Ḥunayy b. Hāritha)。この詩人には、この詩だけが伝えられている。彼はムアッラカ詩人のイムル・アルカイスの友人で、ビザンツのカエサルに会いに行くのに同行したと伝えられている。

詩人は戦闘的なタグリブ族の一員で、部族の功績を誇っている。この部族はアルヤマーマからバビロン周辺に移住し、キリスト教徒になった。詩人の血統を見ると、本詩集 No.41の詩人アルアフナスの遠縁に当たることがわかる。この詩は内容から見て、第1次アルクラーブの戦い (550年ごろ) より後に、さらにまた、ムアッラカ詩人のアムル・ブヌ・クルスームがヒーラの王、アムル・ブヌ・ヒンドを殺害したとされる569年よりも後に詠まれたものと思われる。

クラーブの戦いの日 (Yawm al-Kulāb) と言われているものには、第1次と第2次がありここでは第1次の戦いをさす。この戦いのあと、中央アラビアのキンダ王国は滅亡にいたる。アルアンバーリーはテキスト pp.426-441にわたり、この戦いについて詳しく伝えているが、第1次アルクラーブの戦いは、要約すると以下のようである。

キンダ王家のアルハーリス (al-Hārith) は北アラビア諸部族を支配下におき、アルカシーム地方のガムル・ズー・キンダ (Ghamr Dhū Kinda) を拠点としていた。彼は支配下部族を次のように4人の息子に分割統治させていた。フジュル (Hujr) には、アサド族その他。シュラフビール (Shurāḥbīl) には、バクル・ブヌ・ワーイル族とタミーム族の一部。マアディー・カリブ (Maʿdī Karib) には、カイス・アィラーン族。サラマ (Salama) には、タグリブ、ナミル・ブヌ・カーシトとタミーム族の一部。

アルハーリス王の没後、シュラフビールとサラマの間で紛争が生じ、戦うことになった。両軍はアラビア北部のタグリブ族の水場アルクラーブ (al-Kulāb) で遭遇した。両軍の主力となったのは、シュラフビール側はバクル族、サラマ側はタグリブ族であった。戦いの結果はシュラフビール軍が敗れ、シュラフビールは逃げた。タグリブ族のハビーブ・ブヌ・ウトバ (Ḥabīb b. ʿUtba) が彼を追ったが、王子は追手の足を切り逃げようとした。

しかし、アブー・ハナシュ (ʾAbū Ḥanash) が王子に追いついた。王子は賠償金を支払うから殺すなと求めたが、アブー・ハナシュは許さず相手を槍で刺し、体をつかんで馬から引きずり降ろして首をはね、サラマ王子に届けた。ところが、王子は兄弟に加えられた暴力に、後悔する表情を示したので、アブー・ハナシュは王子の気が変わったと感じて、タグリブ族を連れてイラクへ去り、アルヒーラのアルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーウ王を頼った。

第2次アルクラーブの戦いについては、No.30「まえがき」参照。地名は同じであるが、場所が異なると言われている。この戦いが行われた正確な時期はわからないが、AD550年頃と推定されている。

アルアンバーリーのテキストでは27行となっているが、カイロ版では大英博物館写本によるとして、18行目の1行が加えられているので、これにより28行として訳した。序詩の部分では、分別をわきまえる歳になってから青春時の恋人への思いがよみがえり、かつての恋人の住居跡に立って、彼女が旅立ったときの思い出にふける。次いで、ラクダでの旅の様子に言及したあと、タグリブ族の分裂と弱体化を嘆いている。さらに、復書をせず血債で争いを収めることを蔑み、重税の苦しみを訴え、王侯への抗議に及び、過去の部族の栄光、特に第1次アルクラーブの戦いにおける武勇を自慢している。タウィール (tawil) 調、28行。

(42) テキスト

وَقَالَ جَابِرُ بْنُ حُنَيٍّ التَّغْلِبِيُّ

- | | |
|---|---|
| وَلِلْجَلْمِ بَعْدَ الزَّلَّةِ الْمُتَوَهَّمِ | ١ - أَلَا يَا لِقَوْمِي لِلْجَدِيدِ الْمُصَرَّمِ |
| أَتَى دُونَهَا مَا فَرَطُ حَوْلِ مُجَرَّمِ | ٢ - وَلِلْمَرْءِ يَغْتَاذُ الصَّبَابَةَ بَعْدَ مَا |
| إِلَى مَدْفَعِ الْقِيْقَاءِ فَالْمُتَثَلِّمِ | ٣ - فَيَا دَارَ سَلَمَى بِالصَّرِيْمَةِ فَالْلَوَى |
| لِأَقْضَى مِنْهَا حَاجَةَ الْمُتَلَوِّمِ | ٤ - ظَلَلْتُ عَلَى عِرْقَانِهَا ضَيْفَ فَقْرَةٍ |
| مَصَاصِئِرَهَا بَيْنَ الْجَوَاءِ فَعِيْهِمِ | ٥ - أَقَامْتُ بِهَا بِالصَّيْفِ ثُمَّ تَذَكَّرْتُ |
| إِلَى مُهَذَّبَاتٍ فِي وَشِيحٍ مُقَوِّمِ | ٦ - تُعَوِّجُ رَهْبًا فِي الزَّمَامِ وَتَنْتَنِي |
| إِلَى غَرْضِهَا أَجْلَادُ هَرٍّ مُؤَوِّمِ | ٧ - أَنَا فُتُّ وَزَا فُتُّ فِي الزَّمَامِ كَأَنَّهَا |
| بَدَا رَأْسُ رَعْنٍ وَارِدٍ مُتَقَدِّمِ | ٨ - إِذَا زَالَ رَعْنٌ عَنْ يَدَيْهَا وَنَحْرَهَا |
| دَوِيَّ كَذَفِ الْقَيْنَةِ الْمُتَهَزِّمِ | ٩ - وَصَدَّتْ عَنِ الْمَاءِ الرِّوَاءِ لِحُجُوفِهَا |
| تَرْقَى إِلَى أَعْلَى أَرِيكِ بِسُلْمِ | ١٠ - تَصْعَدُ فِي بَطْحَاءِ عِرْقٍ كَأَنَّهَا |
| غَوَائِلَ شَرٍّ بَيْنَهَا مُتَثَلِّمِ | ١١ - لِيَتَغَلَّبَ أَبْكِي إِذْ أَثَارَتْ رِمَاحَهَا |
| وَمَنْ لَا يَشِدُّ بُنْيَانَهُ يَتَهَدَّمِ | ١٢ - وَكَانُوا هُمْ الْبَانِينَ قَبْلَ اخْتِلَافِهِمْ |
| إِلَى سَلَفٍ عَادٍ إِذَا اخْتَلَّ مُزْرِمِ | ١٣ - بِحَيٍّ كَكُونَلِ السَّفِينَةِ أَمْرُهُمْ |
| مَحَارِمُهُ وَاخْتَلَّهُ ذُو الْمُقَدِّمِ | ١٤ - إِذَا نَزَلُوا الثَّغَرَ الْمَخُوفَ تَوَاضَعَتْ |
| إِذَا وَرَدُوا مَاءً وَزُمِحَ بَنُ هَرْنِمِ | ١٥ - أُنْفُتْ لَهُمْ مِنْ عَقْلِ قَيْسٍ وَمَرْنِدِ |
| يُبَزْزُ وَيُنْزَعُ ثَوْبُهُ وَيُلَطَّمِ | ١٦ - وَيَوْمًا لَدَى الْحَشَارِ مَنْ يَلُو حَقَّهُ |

- ١٧- وَفِي كُلِّ أَسْوَاقِ الْعِرَاقِ إِتَاوَةٌ
 ١٨- وَفَيْضُ الْعِرَاقِ مِنْ أَفْعَاءٍ وَعُذَّةٍ
 ١٩- أَلَا تَسْتَجِي مِنْنَا مُلُوكٌ وَتَتَقَى
 ٢٠- نُعَاطِي الْمُلُوكَ السِّلَمَ مَا فَصَدُوا بِنَا
 ٢١- وَكَأَيُّنْ أَرْزَنَا الْمَوْتَ مِنْ ذِي تَحِيَّةٍ
 ٢٢- وَقَدْ زَعَمْتَ بَهْرَاءُ أَنَّ رِمَاحَنَا
 ٢٣- فَيَوْمَ الْكِلَابِ قَدْ أَزَالَتْ رِمَاحَنَا
 ٢٤- لَيَنْتَزِعَنَّ أَرْمَاحَنَا فَأَزَالَهُ
 ٢٥- تَنَاولَهُ بِالرُّمَحِ ثُمَّ أَتَنَى لَهُ
 ٢٦- وَكَانَ مُعَادِينَا نَهْرٌ كِلَابُهُ
 ٢٧- وَعَمَرُو بَنُ هَمَامٍ صَقَعْنَا جَبِينَهُ
 ٢٨- يَرَى النَّاسُ مِنَّا جِلْدَ أَسْوَدَ سَالِحٍ
- وَفِي كُلِّ مَا بَاعَ امْرُؤٌ مَكْسُ دِرْهَمٍ
 وَرَغِي إِذَا مَا أَكَلُوا مُتَوَحِّمٍ
 مَحَارِمَنَا لَا يَبُوءُ الدَّمُ بِالدَّمِ
 وَلَيْسَ عَلَيْنَا قَتْلُهُمْ بِمُحَرَّمٍ
 إِذَا مَا أَرْدَرَانَا أَوْ أَسَفَ لِمَآثِمِ
 رِمَاحِ نَصَارَى لَا تَحُوضُ إِلَى الدَّمِ
 شُرْحِيْلَ إِذْ أَلَى أَلِيَّةٍ مُقْسِمِ
 أَبُو حَنْشٍ عَنْ ظَهْرِ شَقَاءٍ صِلْدِمِ
 فَخَرَّ صَرِيْعًا لِلْيَدَيْنِ وَلِلْفَمِ
 مَخَافَةَ جَيْشِ ذِي زُهَاءٍ عَرْمَرِمِ
 بِشَنْعَاءٍ تَشْفِي صَوْرَةَ الْمُتَظَلِّمِ
 وَفِرْوَةَ ضِرْعَامٍ مِنَ الْأُسْدِ ضَيْعِمِ

No.42 訳

- 1- おお、わが民よ、助けてくれ。過ぎ去った青春に助けを願う。犯した過ちを正すと思われていた分別（が付くのが遅すぎたことに）救いを寄せてくれ。
- 2- まる一年、恋心と決別して平静に過ごした後で、男が再び、過去の恋にあこがれるとは、（驚きだ）。
- 3- おお、アッサリーマにあったサルマーの住まいよ。（彼女はさらに）アッリワー、次いでアルキーカーウの奔流床、さらにアルムタサッリムへと（移住して行った）。
- 4- 私は、彼女の住まい跡と知って、荒れ果てたそこに、日暮れまで客として留まり、湧き出る彼女の思い出にひたった。
- 5- 彼女は、そこには夏の間住んだが、やがて、冬の住まいはアルジワーウとアイハムの間であることを思い出した。
- 6- 彼女は、手綱をあやつって瘦せたラクダの向きをかせ、真っ直ぐな檜に囲まれて急行する女たちに加わろうとした。
- 7- 雌ラクダは速度をあげ、得意げに走った。まるで、ラクダは醜い大頭の猫¹⁾に、鞍の皮紐のところに爪を立てられて、疾駆しているようであった。
- 8- ラクダの前足と喉元から1つの山頂が去ると、次の踏み越えるべき山頂が現れた²⁾。

1) *hirrin mu'awwami* 「醜い大きな頭の猫」。「猫が爪を立てラクダを走らす」という表現は古詩によく出てくる。アンタラのムアッラカ29, 30行参照。なお、本詩集 No.28, 10行にも似たような箇所がある。

2) ラクダが早駆けして山地を次々に越えていく様子を述べている。地名が以下に多く出てくるが、中央アラビアの東側のアルヤマーマの山や谷を指すものであろう。詩人が属するタグリブ族はメソポタミアやシリア方面まで遊牧していたが、故地はアルヤマーマであった。

- 9-(急行してきたラクダは) 十分な水を飲んでいなかったなので喉が渇き、腹の中で、歌姫の張り裂けたタンバリンのような音をたてていた。
- 10- ラクダはイルクの谷間を登って行ったが、アリーク山³⁾の頂上には、まるで、梯子で登っているようであった。
- 11- タグリブ族のために私は泣く。なぜなら、彼らの槍は部族内に分裂の災難をかきたて (部族の力を弱め) たからである。
- 12- タグリブ族こそは、内紛が起こる前は、(栄光の) 建設者であった。漆喰をしっかりと塗らない者の建物は (いつの日か) 必ず崩落するものだ。
- 13- 部族には船舵のようなものが備わっている。彼らが拠点を定めれば、何事も、限りなく高く鳴り響く先組 (の慣行) に従うべきだ⁴⁾。
- 14- 彼らが恐ろしい辺境に駐屯すれば、けわしい山道もへりくだり、指揮者がそこを拠点とする。
- 15- 私は、彼らが水場に来て、(このラクダは) カイスの血の代金、(あれは) マルサドの血の代金、(それは) ルムフ・ブヌ・ハルサム⁵⁾の血の代金と言って、(復讐をせずに) これを受け取るの蔑んだ⁵⁾。
- 16- 一日でも、徴税人のもとで、税の支払いを延期する者が誰でも、虐待され、着物を剥ぎ取られ、平手で打たれるならば (私はこれを許さない)⁶⁾。
- 17- イラクの全ての市場では、税⁷⁾が課せられている。人が売るもの全てには1ディルハムの税が課せられる。
- 18- イラクの酷暑の季節には毒蛇が多く、ラクダの疫病がはやり、生える草は健康によくたない⁸⁾。
- 19- 王者らは我らに対して控えめに接し、我らが庇護している者に手出しするのを恐れていないのか。流血が (対等者の) 流血を招かない⁹⁾ようにするためである。
- 20- 我らは王者らが我らを公平に扱う限り、平和的に接する。とはいえ、(不公平なら) 彼らを殺めることは、我らに禁じられてはいない¹⁰⁾。
- 21- 我らは、王としての挨拶を受ける者が、我らを軽蔑したり罪悪を負わせようとしたときに、幾人もの王を殺害した¹¹⁾。
- 22- かねて、バフラーウ族は、我ら (タグリブの) 槍はキリスト教徒の槍のようで、血を流すほどには突き刺さらないと蔑んだ¹²⁾。

3) アリーク (ʿArik) は山の名で、棘のある ʿarāk という植物が多く生えている山の意味。

4) *bi-hayyin* の *bi-* は *hayy* 「部族」を説明したもの。

5) タグリブ族は戦う部族であって、殺された者の復讐をせずに、血の代金としてラクダを受け取るのを潔しとしなかった、と回想している。

6) 好戦的なタグリブ族の者として、徴税人の虐待に異議をとなえている。

7) 税を表すのに *ʿitāwa* と *maks* の2語が使われている。前者は地租、後者は商品売上税と説明されている。

8) Lyall による校訂版にはこの1行が脚注に取り上げられているが、カイロ版では、大英博物館の写本によるとして18行目に入れているので、これに従った。

9) *lā yabwuʿu* 「同等のものを招かない」の前に理由を表す接続詞 *ʿan* が省略されている。これが省略されると、動詞は直接法となる (タラファのムアッラカ54行参照)。

10) タグリブ族はキンダやラフム朝など王のような地位についてはいないが、これより劣る者ではないと述べている。

11) タグリブ族が殺した王は、キンダのシュラフビールとラフムのアムル・ブヌ・ヒンドの2名で、詩人は誇張している。

12) タグリブ族はシリアやバビロン近くに移住し、キリスト教徒になった。バフラーウも、のちには

- 23- だが、アルクラーブの戦い¹³⁾の日に、我らの槍はシュラフビールに止めを刺した。
その日、彼は次のように固く誓っていたのだが。
- 24- すなわち、彼は我らの手から必ず槍を奪う (と誓った)。しかし、アブー・ハナシュ
が、頑強で背の高い馬の背から彼を引き落とした。
- 25- アブー・ハナシュは彼に槍を当て、再び刺すと、彼は腰をかがめ両手と口を下にし
て、地面に倒れた。
- 26- 我らに敵対する者の犬どもは、(我らの) 無数の大軍 (が行進するのに) おびえて遠
吠えしたものだ。
- 27- アムル・ブヌ・ハンマームの額にも、我らは剣で恐ろしい一撃を加えた。それは暴
君の気質を直すものであった¹⁴⁾。
- 28- 人々は我らを、毎年脱皮を繰り返す大蛇の皮か、獰猛なライオンの毛皮と見なし、
恐れている¹⁵⁾。

キリスト教徒になるが、この詩が作られた頃はまだ改宗していなかった。タグリブ族はイスラーム時代になってもしばらくはキリスト教徒のままであったが、やがて、イスラームに改宗した。

13) アルクラーブの戦いについては本詩「まえがき」参照。

14) アムル・ブヌ・ハンマームはアムル・ブヌ・ヒンド王のことで、タグリブ族のムアッラカ詩人アムル・ブヌ・クルスームに殺されたことになっている (『アラブ・イスラム研究』7号所収)。

15) 「タグリブ族を毒蛇かライオンのように恐れている」の意

— (43) ラビーア・ブヌ・マクルーム —

رَبِيعَةُ بْنُ مَقْرُومٍ

まえがき

この詩人は、すでに No.38と No.39で紹介している。『歌の書』(19, p.91)によれば、この詩は、詩人が捕らえられたとき、ダッバ族の支族のアッシード (al-Sīd) のマスウード・ブヌ・サーリム・ブヌ・アビー・スルマー (Mas'ūd b. Sālīm b. Abī Sulmā) (本詩の脚注3ではマスウード・ブヌ・ズハイル・アッダッビー Mas'ūd b. Zuhayr al-Dabbī) が救出したので、救出者を褒め称えて詠んだものとされている。

序詩の部分は1-4行と短く、何行かが失われたかもしれない。恋人の名前も、本詩ではスアード (Su'ād) とあるが、『歌の書』では、アルハリート (al-Khalīṭ) となっている。序詩について、8行からはマスウードを賞賛している。バシート (basīṭ) 調、14行。

(43) テキスト

وَقَالَ رَبِيعَةُ بْنُ مَقْرُومٍ

- | | |
|---|---|
| وَأَخْلَقْتَكَ أَبْنَةً الْحُرِّ الْمَوَاعِيدَا | ١ - بَانَتْ سَعَادُ فَأَمْسَى الْقَلْبُ مَعْمُودَا |
| مِنْ حَوْمَلٍ تَلْعَاثُ الْجَوِّ أَوْ أُوْدَا | ٢ - كَأَنَّهَا طَبِيبَةٌ بِكُرٍّ أَطَاعَ لَهَا |
| تَحَالُهُ فَوْقَ مَتْنِيَّهَا الْعَنَاقِيدَا | ٣ - قَامَتْ تُرَيْكُ غَدَاةَ الْبَيْنِ مُنْسِدَلَا |
| مُخَيِّفَا نَبْتُهُ بِالظَّلَمِ مَشْهُوْدَا | ٤ - وَبَارِدًا طَيِّبًا عَذْبًا مُقْبَلُهُ |
| أَعْمَلْتُهَا بِي حَتَّى تَقْطَعَ الْبِيدَا | ٥ - وَجَسْرَةٍ حَرَجٍ تَدْمَى مَنَاسِمُهَا |
| وَدَيْقَةً كَأَجِيجِ النَّارِ صَيْحُودَا | ٦ - كَلَفْتُهَا، فَرَأَتْ حَقًّا تَكْلُفُهُ |
| أَصْدَاؤُهُ، مَا تَنَى بِاللَّيْلِ تَغْرِيدَا | ٧ - فِي مَهْمِهِ قَذْفٍ يُخْشَى الْهَلَاكُ بِهِ |
| لَا تَسْتَرِيحِينَ مَا لَمْ أَلْقِ مَسْعُودَا | ٨ - لَمَّا تَشَكَّتْ إِلَى الْأَيْنِ قُلْتُ لَهَا |
| سَهْلَ الْفِنَاءِ رَجِيبَ الْبَاعِ مَحْمُودَا | ٩ - مَا لَمْ أَلَاقِ أَمْرًا جَزَلًا مَوَاهِبُهُ |
| أَسْمَعُ بِمِثْلِكَ لَا حِلْمًا وَلَا جُودَا | ١٠ - وَقَدْ سَمِعْتُ بِقَوْمٍ يُحْمَدُونَ فَلَمْ |
| وَمَا أَنْبِئُ عَنْكَ الْبَاطِلَ السَّيِّدَا | ١١ - وَلَا عَقَافًا وَلَا صَبْرًا لِنَبَائِبَةِ |
| يُلْفَى عَطَاؤُكَ فِي الْأَقْوَامِ مَنُكُودَا | ١٢ - لَا حِلْمَكَ الْجِلْمُ مَوْجُودٌ عَلَيْهِ، وَلَا |
| أَشْبَهْتَ آبَاءَكَ الصَّيِّدَ الصَّنَادِيدَا | ١٣ - وَقَدْ سَبَقْتَ بَغَايَاتِ الْجِيَادِ وَقَدْ |
| لَا زِلْتَ عَوْضُ قَرِيرِ الْعَيْنِ مَحْسُودَا | ١٤ - هَذَا ثَنَائِي بِمَا أَوْلَيْتَ مِنْ حَسَنِ |

No.43 訳

- 1- スアードは去ってしまった。そのため、お前の心は恋病に苦しむ。自由人の娘はお前との数々の約束を破ったのだ¹⁾。
- 2- 彼女は、ハウマル²⁾、または、ウードの谷間のくぼ地が十分な草を育て与えている、処女カモシカのようなものである。
- 3- 別れの朝、彼女は立って、お前がブドウの房かと思うような髪を背に垂らして見せた。
- 4- また、彼女は、涼やかで美しい口元を見せたが、それは、口づけすれば甘く、そのなかに生えている歯は清らかな唾液に浸されて白く輝き、蜂蜜のように美味である。
- 5- 私は、なんと多くの背の高い、大胆で、足の裏から血を流している雌ラクダに乗って、砂漠を横断する旅をしたことであろうか。
- 6- 私は、ラクダに炎のような酷暑のもとでの旅を課したが、ラクダはそれを義務として受け入れた。
- 7- 水が全くない広漠とした砂漠のなかの死の恐怖に襲われるところで、鳥は夜どうし、倦むことなく鳴いていた。
- 8- ラクダが私に疲れを訴えたとき、私は、「マスウード³⁾に会うまでは、休んではならぬ。
- 9- 限りなく贈り物をし、寛大にもてなし、この上なく気前がよく⁴⁾、褒め称えられているお方にお目にかかるまでは」と言い聞かせた。
- 10- 私は、褒められている人々の話は聞いているが、あなたほど寛容で、鷹揚なお方の話は聞いたことがない。
- 11- あなたは、災難に対しては、この上なくよく自制し、忍耐強いお方です。あなた、すなわち、アッシード⁵⁾につき、私は空虚なことは伝えない。
- 12- あなたの寛容さは、人々の怒りを買うようなものではなく、あなたの人々への贈物は決して、少ないとみなされるものではない。
- 13- あなたは鷹揚さで卓越のきわみに達したお方であり、人々の指導者⁶⁾であった高貴なあなたの父祖に似ている。
- 14- 以上があなたが私のためになされた善行に対する私の賛辞です。どうか、いつまでも幸福で、人々から羨ましがられるご身分であらせられますように。

1) *ʿibnatu l-hurri* 「自由人の娘」。アラブは自由人は寛大で善良で、何者よりも価値あるものと見なしていた。自らを *hurr* 「自由人」と呼び、奴隷の血筋でないことを誇るのがよく見られる。『歌の書』(19, p.91) では、スアード (*Suʿād*) がアルハリート (*al-Khalīṭ*) となっている。

2) ハウマル (*Hawmal*) という地名はイムル・アルカイスのムアッラカ1行にある。

3) 解説ではマスウードをマスウード・ブヌ・ズハイル・アッダッビー (*Masʿūd b. Zuhayr al-Ḍabbī*) としている。「まえがき」参照。

4) *saḥla l-fināʾi raḥība l-bāʾi* 「中庭が平坦で広げた腕が長い」とは、「この上なく気前が良い」の意。

5) 詩人の祖先はガイズ・ブヌ・アッシード (*Ghayz b. al-Sīd*)。こでの賞賛相手の祖先はズアイブ・ブヌ・アッシード (*Dhuʿayb b. al-Sīd*) で、両者の祖先はダッバ (*Ḍabba*)。

6) *ṣīd* は単数 (男) *ʿaṣyad*, (女) *ṣaydāʾ*。「首をもたげる、指導的な人物」の複数。

—— (44) アルアスワド・ブヌ・ヤアフル・アルナフシャリー ——

الْأَسْوَدُ بْنُ يَعْفُرَ النَّهْشَلِيِّ

まえがき

本名 アルアスワド・ブヌ・ヤアフル・ブヌ・アブド・アルアスワド (al-ʿAswad b. Yaʿfur b. ʿAbd al-ʿAswad)。この詩人はラフム朝最後の王アンヌアマーン・アブー・カーブースに仕えた人物で、弱視であったが、年老いてほとんど盲目になった。

彼の詩はここに訳出したものと、『歌の書』(11, pp.134-9) に伝えられているもののほかは失われている。この詩の8-11行から見て、詠まれたのはラフム朝が滅び(602年)、イヤード (ʿIyād) 族がペルシャ王に攻撃され、四散した直後と推定される。彼の詩は本詩集 No.125にも掲載されている。

『歌の書』(20, p.24) によると、イヤード族はイラクのペルシャ人にとっては乱暴な存在であった。彼らはサワード地でしばしば略奪を行っていたが、やがて、ペルシャの貴族の女性が花嫁として護送されるのを襲い、彼女を捕らえるという事件を起こした。これがペルシャ皇帝 (ホスローI世 (531-579) か、同II世 (590-628) か不明であるが、『詩と詩人たち』p.97では、前者の名アヌシルワーンとしている) の激怒するところとなり、騎兵団に攻撃させた。しかし、この騎兵団はユーフラテスを渡ったところで、イヤード族の攻撃を受け全滅した。のちに、兵らの頭蓋骨の山ができ、その地に修道院が建てられ、頭蓋骨修道院 (Dayr al-Jamājim) と呼ばれた。

そこでペルシャ王は、タグリブ族のマーリク・ブヌ・ハーリサ (Mālik b. Ḥāritha) という族長に、4千の騎兵団 (『詩と詩人たち』では6万人) を派遣した。イヤード族のラキート・ブヌ・マアマル (Laqīṭ b. Maʿmar) という詩人がこの情報を聞き、ペルシャ軍攻撃を警告する詩をイヤード族に送ったが、彼らはこれを無視し、攻めてきたペルシャ軍に蹂躪されて四散し、アルジャジーラ、シリヤ、サワードなどに細々と住むようになり、一部の者はラフム朝を頼ったと伝えられている。

彼の父の名はユーフィル (Yuʿfir) と読まれることもある。序詩は年老いて視力を失い、不安にかられ、ひたすら死を待つ心境を訴えるという、風変りなものである(1-7行)。ついで、時の流れの中で滅び去った、王侯や部族への回想が詠まれている(8-20行)。次に、青春時代における飲酒、歌姫などの思い出にふれ(21-28行)、狩猟、ラクダを描写し(29-35行)、最後に時世のむなしさに言及している。アルアンバーリーは全体で35行としているが、カイロ版では14行目が追加され36行となっているので、後者に従った。カーミル (kāmil) 調、36行。

(44) テキスト

وَقَالَ الْأَسْوَدُ بْنُ يَعْفَرَ النَّهْشَلِيُّ

- ١ - نَامَ الْحَلِيُّ وَمَا أَحْسُ رُقَادِي وَالْهَمُّ مُحْتَضِرٌ لَدَيَّ وَسَادِي
- ٢ - مِنْ غَيْرِ مَا سَقَمٍ وَلَكِنْ شَقْنِي هُمْ أَرَاهُ قَدْ أَصَابَ فُؤَادِي
- ٣ - وَمِنْ الْحَوَادِثِ لَا أَبَا لَكَ أَنْنِي ضُرِبْتُ عَلَى الْأَرْضِ بِالْأَسْدَادِ
- ٤ - لَا أَهْتَدِي فِيهَا لِمَوْضِعِ تَلْعَةٍ بَيْنَ الْعِرَاقِ وَبَيْنَ أَرْضِ مُرَادِ
- ٥ - وَلَقَدْ عَلِمْتُ سِوَى الَّذِي نَبَّأْتَنِي أَنَّ السَّبِيلَ سَبِيلُ ذِي الْأَعْوَادِ
- ٦ - إِنَّ الْمَنِيَّةَ وَالْحُثُوفَ كِلَاهُمَا يُوفِي الْمَحَارِمَ يَرْثِيَانِ سَوَادِي
- ٧ - لَنْ يَرْضِيَا مِنِّي وَقَفَاءَ رَهِينَةٍ مِنْ دُونِ نَفْسِي طَارِفِي وَتَلَادِي
- ٨ - مَاذَا أُؤْتِلُ بَعْدَ آلِ مُحَرِّقِ تَرَكُوا مَنَازِلَهُمْ وَبَعْدَ إِيَادِ
- ٩ - أَهْلِ الْخَوَزَنَقِ وَالسَّدِيرِ وَبَارِقِ وَالْقَصْرِ ذِي الشَّرَفَاتِ مِنْ سِنَادِ
- ١٠ - أَرْضًا تَخَيَّرَهَا لِذَا رِ ابْنِ أُمِّ دُوَادِ كَعْبُ بْنُ مَامَةَ وَابْنُ أُمِّ دُوَادِ
- ١١ - جَرَّتِ الرِّيَاحُ عَلَى مَكَانِ دِيَارِهِمْ فَكَأَنَّمَا كَانُوا عَلَى مِيعَادِ
- ١٢ - وَلَقَدْ غَنُوا فِيهَا بِأَنْعَمِ عَيْشَةٍ فِي ظِلِّ مُلْكٍ ثَابِتِ الْأَوْتَادِ
- ١٣ - نَزَلُوا بِأَنْقَرَةَ يَسِيلُ عَلَيْهِمْ مَاءُ الْفُرَاتِ يَجِيءُ مِنْ أَطْوَادِ
- ١٤ - أَيْنَ الَّذِينَ بَنَوْا فَطَالَ بِنَاؤُهُمْ وَتَمَتَّعُوا بِالْأَهْلِ وَالْأَوْلَادِ
- ١٥ - فَإِذَا النِّعَمُ وَكُلُّ مَا يُلْهَى بِهِ يَوْمًا يَصِيرُ إِلَى بِلَى وَنَفَادِ
- ١٦ - فِي آلِ غَرْفٍ لَوْ بَعِثْتَ لِي الْأُسَى لَوَجَدْتَ فِيهِمْ أَسْوَةَ الْعُدَادِ
- ١٧ - مَا بَعْدَ زَيْدٍ فِي فَتَاةٍ فُرِقُوا قَتَلًا وَنَفْيًا بَعْدَ حُسْنِ تَادِي
- ١٨ - فَتَخَيَّرُوا الْأَرْضَ الْفَضَاءَ لِعَزِّهِمْ وَيَزِيدُ رَافِدُهُمْ عَلَى الرُّفَادِ
- ١٩ - إِمَّا تَرَيْنِي قَدْ بَلَيْتُ وَغَاضَنِي مَا نِيلَ مِنْ بَصْرِي وَمِنْ أَجْلَادِي
- ٢٠ - وَعَصَيْتُ أَصْحَابَ الصَّبَابَةِ وَالصَّبَا وَأَطَعْتُ عَاذِلَتِي وَلَانَ قِيَادِي
- ٢١ - فَلَقَدْ أُرُوحَ عَلَى التَّجَارِ مُرَجَّلًا مَذَلًا بِمَالِي لَيْسَ أَجْيَادِي
- ٢٢ - وَلَقَدْ لَهَوْتُ وَلِلشَّبَابِ لَذَاذُهُ بِسُلَافَةٍ مُرَجَّتِ بِمَاءِ غَوَادِي
- ٢٣ - مِنْ حَمْرِ ذِي نَطْفٍ أَعَنَّ مُنْطَقِ وَاقِ بِهَا لِدَرَاهِمِ الْأَسْجَادِ
- ٢٤ - يَسْعَى بِهَا ذُو ثَوْمَتَيْنِ مُشَمِّرٌ قَنَأْتُ أَنَامِلُهُ مِنْ الْفُرْصَادِ
- ٢٥ - وَالْبَيْضُ تَمْشِي كَالْبُدُورِ وَكَالدُّمَى وَنَوَاعِمُ يَمْشِينَ بِالْأَرْفَادِ

- ٢٦- وَالْبَيْضُ يَزِمِينَ الْقُلُوبَ كَأَنَّهَا
 ٢٧- يَنْطِقْنَ مَعْرُوفًا وَهُنَّ نَوَاعِمُ
 ٢٨- يَنْطِقْنَ مَحْفُوضَ الْحَدِيثِ تَهَامِسًا
 ٢٩- وَلَقَدْ عَدَوْتُ لِعَازِبٍ مُتَنَادِرٍ
 ٣٠- جَادَتْ سَوَارِيهِ وَأَزَرَ نَبْتَهُ
 ٣١- بِالْجَوِّ فَلَا مَرَاتٍ حَوْلَ مُغَامِرٍ
 ٣٢- بِمُشَمَّرٍ عَتَدَ جَهِيْزٍ شَدُّهُ
 ٣٣- يَشْوِي لَنَا الْوَحْدَ الْمُدِلَّ بِحُضْرِهِ
 ٣٤- وَلَقَدْ تَلَوْتُ الظَّاعِنِينَ بِجَسْرَةٍ
 ٣٥- عَيْرَانَةٍ سَدَّ الرَّبِيعُ حَصَا صَهَا
 ٣٦- فَإِذَا وَذَلِكَ لَا مَهَاهَ لِذِكْرِهِ
- أُذِحُّ بَيْنَ صَرِيْمَةٍ وَجَمَادٍ
 بَيْضُ الْوُجُوهِ رَقِيقَةُ الْأَكْبَادِ
 فَبَلَعْنَ مَا حَاوَلْنَ غَيْرَ تَنَادِي
 أَخَوَى الْمَذَانِبِ مُؤْنِقُ الرُّوَادِ
 نُفَاً مِنَ الصَّفَرَاءِ وَالرُّؤَادِ
 فَبِضْفَارِجٍ فَقَصِيْمَةِ الطُّرَادِ
 قَيْدِ الْأَوَابِدِ وَالرَّهْمَانِ جَوَادِ
 بِشَرِيْحٍ بَيْنَ الشَّدِّ وَالْإِيرَادِ
 أَجْدٍ مُهَاجِرَةِ السَّقَابِ جَمَادِ
 مَا يَسْتَتِيْبُ بِهَا مَقِيلُ قُرَادِ
 وَالْدَّهْرُ يُعْقِبُ صَالِحًا بِفَسَادِ

No.44 訳

- 1- 気楽な者は眠るが、私は、いつも不安が枕元に現れるので、眠気を感じない。
- 2- それは病ではないが、見るところ、私の心を襲って苦しめる不安であって、私を、やつれさせてしまった。
- 3- 悲惨な出来事ではあるが、—— そなたに父がないように¹⁾—— 私は (視力を失い) 思いど通りに大地を歩けなくなった (大地で進む方角が塞がれた)。
- 4- イラクと (アルヤマンの) ムラード族の間の広い川床のいかなるところにも、(盲目のために) 私には道が閉ざされた²⁾。
- 5- 貴女が (長生きしてください、と言ってくれたが)、私は棺の主³⁾と同じ道をたどって死を迎えることを、良く知っている。
- 6- 死と破滅の両者は、山頂の突出部に登って、(おぼつかない足取りの) 私を見張っている。
- 7- 両者は、償い金の支払いは断じて認めない。即ち、私が受けた遺産や生涯かけて稼

1) *lā ʿabā la-ki* 「そなたに父がないように」は虚辞の一種で、ここでは詩句の隙間を埋めるのに用いられているものであり、訳しても意味を成さない。

2) ムラード (Murād) 族はユハービル (Yuhābir) とも呼ばれるアルヤマン系の部族で、もともと、ナジュラーン周辺に住んでいた。詩人は目が見えなくなり、南から北のイラクまで旅が出来なくなった、と嘆いている。

3) *dhū al-ʿawād* 「棺の主」。*ʿawād* < 単数 *ʿūd*。なお、アブー・ウバイドによると、「ズー・アルアワード」は人名で、タミームの支族、ウサイイド (ʿUsayyid) 族のアクサム・ブヌ・サフイー (ʿAktham b. Saḥfī) の祖父、ラビーア・ブヌ・マハーシン・ブヌ・ムアーウィヤ (Rabīʿa b. Makhāsīn b. Muʿāwiya) のこと。彼は富豪で威勢があり、350歳まで生きたと言われている。彼は豪勢なテントの中に板製のベッドを置き、貧者らを招いてよく助けたとのことで、下の句は、「それほど長生きした棺の主さえ死は避けられなかった。私もいずれ死ぬ」と述べていることになる。

- いだ金品ではなく、私のいのちしか受け入れない。
- 8- ムハッリク家が彼らの宮殿を後にして滅び、イヤード族が消滅したこの期に及んで私に何の希望があらうか⁴⁾。
- 9- アルハワルナク宮殿とアッサディール宮殿とバーリク (の水場) とシンダード運河のそばの高い胸壁を備えた宮殿の人々が亡くなったあと、(私に何の希望があらうか)⁵⁾。
- 10- カアブ・ブヌ・マーマとアブー・ドゥアードが彼らの父祖のために選んだ土地のことであるが⁶⁾、
- 11- 今や、彼らが住んでいた館は風が吹きすさび (廃墟となった)。まるで、彼らは予定された時に消滅したようである。
- 12- 彼らは、かつてこの地に住み、揺ぎない⁷⁾王国の庇護のもとで、至福の生活を享受していた。
- 13- (一族四散のあと) 彼らは、アンキラ⁸⁾に移り住んだが、そこへは、山地からユーフラテスの水が流れ下っていた。
- 14- 長きにわたり、営々と館を築き、妻子らに恵まれた人々は、一体、いずこに消えていったのか⁹⁾。
- 15- 贅を尽くした生活も、耽溺した歓楽も、いつの日か色あせ、無に帰するものだ。
- 16- 貴女が私に事例を示せと望むなら、ガルフ家¹⁰⁾を見るがよい。貴女は彼らの中に幾多の事例を見出すであらう。
- 17- ザイド亡き後、(我らに何の希望があらうか)。彼の一族はひと時は強勢であったが、1人の娘のために蹴散らされ、殺され、追放されたのである¹¹⁾。

4) ムハッリク (Muḥarriq) 家はアルヒーラのラフム朝王家のことで、アルアンバーリーが、ガッサーンと説明しているのは誤りであろう (No.9, 40行、No.12, 14行参照)。イヤード族については「まえがき」で述べた。

5) アルハワルナク (al-Khawarnaq) は、アラブの伝説上の有名な宮殿。ササーン朝のヤズデギルド I 世、399-420) の時代、アルヒーラのヌウマーン・ブヌ・イムルアルカイス (Nu'mān b. ʿImr al-Qays) に王子バフラーム (のちのバフラーム・ゴール Bahrām Gōr 王、420-438) を託し、砂漠に接した健康な土地での養育を依頼した。アルヒーラの王はこれに応え、シニンマール (Sinimmār) という非アラブ人建築家に命じてこの宮殿を建てた。アッサディール (al-Sadīr) はアルヒーラの西側の砂漠に建てられた宮殿。バーリク (Bāriq) はアルカーデシーヤとアルバスラの間の水場。シンダード (Sindād) はアルヒーラとアルウブッラを結ぶ運河。これらに関連する建造物のことかもしれない。

6) カアブ・ブヌ・マーマ (Ka'b b. Māma) はイヤードの族長で、ジャーヒリーヤ時代で気前よさの第一人者、第2位はハーティム・タイイ (Ḥaṭim Ṭayyī), 第3位はハリム・ブヌ・シナーン (Harim b. Sinān)。イブン・ウナム・ドゥアード (Ibn ʿUmm Duʿād) は、アブー・ドゥアード・アルイヤデー (ʿAbū Duʿād al-ʿIyādī) というイヤード族の有名な詩人で、馬の描写に優れていた。アルヒーラのアルムンジル III 世 (505-554) に、厩舎係として仕えた。

7) *ṭhābit al-ʿawṭādi* 「(杭が不動の) 揺るぎないこと」を比喩的に表現したもの。

8) アンキラ (ʿAnqira), アンクラ (ʿAnqura) はトルコのアンカラではなく、シリアの出岳地から平原にユーフラテスが流れるあたりの地名で、イヤード族の一部がペルシャ王に攻められ、移住していた。

9) カイロ版で追加。

10) ガルフ (Gharf) はタミームの支族で、詩人の血筋につながっている。次行のザイド (Zayd) も同様。

11) ラフム朝のアルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーイ王 (554没) が、アルヤマン出の従者と結婚させるとしてザイドの娘を求めたのに対して、彼が断った。王は怒って一族の多数を殺しラクダを奪い、生き残った者は領地から追放した (No.27, 17行参照)。

- 18-(滅ぼされる前には) 彼らはその威勢ゆえに、広大な土地を選び、彼らの支援者は、いかなる支援者にも勝る支援を与えていた。
- 19- もし貴女が、私はやつれはて、授けられた視力が衰え、手足も衰弱していると見るなら、
- 20- そして、私が恋する人々の仲間にならず、青春の情熱に従わず、非難する女の言葉を受け入れ、扱いやすい老いぼれになったと見るなら、(それでよい)。
- 21- だが、かつては、私は髪を櫛ですき、毎夜、金に糸目をつけずに、酒屋に酒を買いに出かけたものだ¹²⁾。
- 22- 私は、最新極上のブドウ酒¹³⁾を、夜明け前の雨水で割って飲み楽しんだが、まことに、青春は甘味なものであった。
- 2r- ブドウ酒は、腰帯を締めた、鼻声の、耳飾をした若者から買ったものであるが、彼はそれをカエサル¹⁴⁾の刻印が刻まれた銀貨で仕入れてきたのである¹⁴⁾。
- 2i- 2つの真珠の耳飾りをつけた若者が袖をまくりあげて、酒を注いでまわるが、彼の指はブドウ酒のために、桑の実のように深紅に染まっていた¹⁵⁾。
- 25- 満月か大理石の彫像を思わす、柔和な白人女性が大杯を持って、客の間に給仕してまわった¹⁶⁾。
- 26- 白人女性は瞳で男たちの心を射る。彼女らは、砂地と岩石の間のダチョウの卵のように美しい¹⁷⁾。
- 27- 彼女らは優しく語り、柔和で、顔は白く輝き、腰の辺り¹⁸⁾はふくよかである。
- 28- 彼女らは、大声で叫ぶこともなく、ささやくように小声で話すだけで、苦もなく望んだものを手に入れる。
- 29- 私は早朝、人々が互いに警戒しあう危険な遠隔地に(牧草を求めて)出かけたものだ。その地の(岩場から)流れる小川が濃い緑の草に覆われていれば、牧草を探す者を喜ばす。
- 30- 夜来の雨雲が豊かな雨を注ぎ、あたり一面に、アッサフラーウとアズブバード¹⁹⁾の群生をよく育て、一段と緑を増していた。
- 31- すなわち、ムガーミル周辺のアルジャウウとアルアマラート、およびダーリジュと、猟師らが良い狩猟場のカシーマあたりのことである²⁰⁾。
- 32-(私が乗った)馬は背が高く、常に、駆け出す体勢をとっていた。この馬は野獣を追

12) *layyinān ʿajyādī* 「首筋柔らかく」は、「若さ」を表す比喩約表現。

13) *sulāfa* はブドウを収穫したさい、搾る前に滲み出たジュースで作ったブドウ酒。ブドウ酒の水割りについては No.8, 16行参照。

14) イラクでは、酒はベルシャ人かユダヤ人が売っていた。

15) *tūma* 「真珠の耳飾」は「銀製の耳飾」との説もある。非アラブの若者であることを示している。

16) 宴会で女性も給仕役を務めていたことを物語っている。女性が大理石の彫像にたとえられる例は No.16, 57行にもある。なお、アフマドは違った説明をしており、それによると訳は、「私は満月か大理石のような女性と戯れた。ふくよかな彼女は重たげな尻を振って歩み出た」となる。彼は、*bi-l-ʿarfādi* を *bi-l-ʿardāfi* と異なる語で読んでいる。

17) *ʿudhīyū* は単に「巣」の意味であるが、ここでは、「卵で一杯の巣の卵のように、女性が美しい」と言ったものであろう。

18) *ʿakbād* (< 単数 *kabid* 「肝臓、気質、心」)は、「腰の辺り」との解説に従った。

19) *al-ṣafrā* は「レタス風の草」で、ラクダの好物。*al-zubbād* は「オオバコの1種」。

20) ダーリジュはイムル・アルカイスのムアッラカ73行にもある地名。これらの土地はタイイ族の山地から、カシームにいたる丘陵地の草原であらう。カシーマ (*Qaṣīma*) は同地域内の地名と思われる。

い詰めるほど俊足で²¹⁾、競馬においても、優れた走力を見せた。

33- この駿馬は、足の速さを誇る野牛（または、野生のロバ）を、緩急自在の脚力で追い詰め、我らに焼肉を食べさせてくれたものだ。

34- 私はかつて、去り行く人々のあとを、大型で頑強な雌ラクダに乗ってついて行ったものだ。そのラクダは、もはや、子を産むこともなく、乳も涸れていた²²⁾。

35- まるで野生のロバのように頑丈なラクダで、春（草）がラクダを隙間なく丸々と太らせ、（皮膚が滑らかになり）ダニが昼寝する箇所も無くなっていた。

36- 以上、全ては（過ぎ去った事どもで）、述べてもむなしい。時世は福のあと没落をもたらすものだ。

21) *qayd al-ʿawābidi*. この表現はイムル・アルカイスのムアッラカ53行にあり、「野獣に勝る俊足」と訳している。

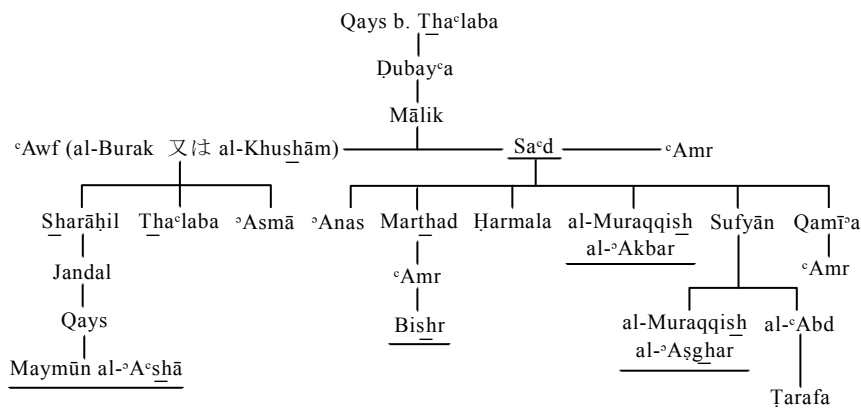
22) 不妊で若くなく、ミルクが涸れたラクダが最も頑強とされている。

— (45) アルムラッキシュ・アルアクバル (大ムラッキシュ) —

المُرَقَّشُ الْأَكْبَرُ

まえがき

この詩人の本名はアムル・ブヌ・サアド・ブヌ・マーリク・ブヌ・ドゥバイア (°Amr b. Sa'd b. Mālik b. Ḍubay'a) であるが、冒頭のアムル (°Amr) をアウフ (°Awf) とする説もある。本詩集には彼の作品として、No.45から No.54までの10編および、補遺に2編、計12編の詩が取り上げられている。アルムラッキシュ (al-Muraqqish) という異名は、No.54, 2行目 *raqqasha fī zahri al-°adīmi qalam* 「皮の表面を筆が文字で飾った……」と詠んでいるのにちなんで付けられたとされている。おそらく、詩作に非凡であったところから、このように呼ばれたものであろう。彼はバクル族とタグリブ族の間で戦われたバスースの戦い (525-530年頃) に参加した比較的に古い時代の戦士兼詩人である。彼の一家は多くの詩人を輩出している。Lyall による一家の系譜図は以下のとおりで、下線のある人物は詩が今日に伝えられている。



(*The Mufaddaliyat: An Anthology of Ancient Arabian Odes*, Lyall, Oxford, 1918, p.166)

詩人の父のサアド (Sa'd) の詩はハマーサ (ḥamāsa) 詩集に載っている。アムル・ブヌ・カミーア (°Amr b. Qamī'a) とタラファ (Ṭarafa) には、それぞれ詩集があるが、後者は有名なムアッラカ詩人である。アルムラッキシュ・アルアクバルは『歌の書』でも取り上げられ、若干の断片詩が紹介されている。アルムラッキシュ・アルアスガル (al-Muraqqish al-°A'sghar 小ムラッキシュ) の詩は本詩集 No.55-59の5編が伝えられている。

バスースの戦いにおいて、詩人の祖先であるカイス・ブヌ・サアラバ (Qays b. Tha'labā) 家の指導者はサアド・ブヌ・マーリク (Sa'd b. Mālik) であった。彼の兄弟のアウフ (°Awf) は、戦闘から退却する味方は殺すと言って、兵士らを奮い立た

せたと言われているが、キダ (Qida) という場所での戦いでラクダが跪いた (ʿabraka) ので、アルブラク (al-Burak) という綽名がつけられた。もう一人の兄弟アムル・ブヌ・マーリク (ʿAmr b. Mālik) は、タグリブ族の指導者ムハルヒル (al-Muhalhil) を捕らえ、死ぬまで拘留した人物とされている。

アルアンバーリーの解説書 (Lyll 校訂) pp.459-460に、この詩を理解するうえで参考となる次のような話が伝えられている。『歌の書』(5, p.190) にも同じ逸話が記録されている。アルムラッキシュ・アルアクバルは叔父であるアウフ・アルブラクの娘、アスマーウ (ʿAṣmā) と一緒に育てられ、彼女が成人したとき求婚した。これに対して叔父は、詩人が部族の長となり、王侯らを訪ねる身分になれば、結婚を認めると答えた。詩人はアルヤマンのある王を訪ねて賞賛詩を捧げ、褒美をもらい、しばらく宮殿に留まった。他方、叔父のアウフ一家は飢饉に見舞われ、餓死寸前の苦境に陥った。このような折に、ナジュラーンに住んでいたアルヤマン系のムラード (Murād) 族のある男が、もし娘と結婚させてくれたら、ラクダ100頭を提供すると持ちかけた。叔父アウフはこれを受け入れ、その男はアスマーウを妻にして連れ去った。

やがて、詩人が帰郷する日が迫ってくると、詩人の兄弟や従兄弟たちは、この一件が露見するのを恐れた。彼らは雄羊を殺して肉を食べ、骨を衣類に包んで埋めて墓とし、帰宅した詩人に「アスマーウは死んだ、これがその墓だ。」と伝えた。それ以後、詩人は毎日墓を訪れ、彼女への思いに浸って時を過ごすようになった。

ある日のこと、墓のそばで眠っていると、彼の兄弟の子らが羊の足首の骨をめぐって口論を始めた。そのうちに1人の子が、「これは殺された羊の足首だ。皆で殺して埋めて、アルムラッキシュにアスマーウの墓だと言ったのだ。お父さんがこの足首を僕にくれたんだ。」と言った。詩人は驚いて起き上がり、少年を問い詰め、真相を知った。詩人は恋病のため衰弱していたが、彼の女召使いとその夫であるグファイラ (Gḥufayla) 族の男にラクダに鞍を着けさせ、彼らを連れてアスマーウの夫であるムラード族の男を訪ねる旅に出た。

彼は日々衰弱しながら、やがて下ナジュラーンのムラード族の土地にあるフッバーン (Khubbān または「ハッバーン」 Khabbān) という洞窟に着いた。しかし、彼はもはや助からないほど衰弱していた。これを見て、伴をしてきたグファイラ族の男は妻に、「もうすぐ死んでしまうだろう。一緒にぐずぐずしておれぬわ。さあ、帰ろう。」と言った。妻は最初はたじろいでいたが、やがて、説得された。少年時代に詩人は兄弟のハルマラとともに、父に頼まれたアルヒーラの男から文字の書き方を習っていた。詩人は連れてきた夫婦のやり取りを聞くと、2人のすきを見て、ラクダの鞍にこの詩を書きつけた。やがて、野獣が彼を襲って、彼の鼻と体の一部を食った。

一方、グファイラ族の男と妻は引き返し、アルムラッキシュは旅の途中で死んだと告げた。だが、彼の兄弟ハルマラは、鞍に書かれていた詩を見て、男を問い詰め自白させ、夫婦を成敗した上で、詩人が伏せている洞窟へと旅立った。

瀕死状態のアルムラッキシュが横たわっている洞窟に、ある羊飼いが時々立ち寄

り、休息していた。そこで、アルムラッキシュはその羊飼いに、誰の羊飼いかと尋ねた。すると、偶然なことに、彼はアスマーウの夫の羊飼いであった。アルムラッキシュは、アスマーウに会ったことがあるかと尋ねた。羊飼いが彼女に合うことはない、と答えたので、彼女に連絡する手立てはないか、と尋ねた。羊飼いは、羊の群れを連れて帰ると、彼女に仕える召使が器を持ってくるので、雌ヤギのミルクを搾って入れてやる、と答えた。アルムラッキシュは、指輪をはずして羊飼いに渡し、ミルクを搾ったとき、その器に指輪を入れてくれ、後でお礼をするからと、言いつけた。羊飼いは言いつけを守った。

アスマーウはミルクを飲むと、指輪が歯に当たり、明かりを持ってこさせてよく見ると、それはかつての婚約者アルムラッキシュの指輪であるのに気づいた。そこで、彼女は召使にこの件を尋ねたが、召使は何も知らなかった。アスマーウはナジュラーンで仲間と酒を飲んでいて夫にこの件を伝え、夫が羊飼いを問い詰めて、フッバーンの洞窟に瀕死状態の男がいることを知った。アスマーウはその男はアルムラッキシュに違いないと言い、夫は馬に、彼女はラクダに乗り、現場へと急がせ、一昼夜で洞窟に着いた。そのときには、アルムラッキシュはまだ生きていたので、住まいに連れ帰り手を尽くしたが、まもなく息を引き取った。兄弟のハルマラが訪ねていくと、既に、埋葬された後で、彼はアスマーウにも会えないまま、帰った。

この逸話はムラード族のある男、とか、羊飼いや召使、詩人の伴をした夫婦いずれも、名前が明示されていない点に不自然さを感じる。指輪にまつわる他の逸話を借用したもののようだ。

古来、アラブの学者は詩人としては、アルムラッキシュ・アルアスガルのほうが優れているとしてきた。大ムラッキシュは、多様な韻律 (*kāmil*, *wāfir*, *ṭawīl*, *khafīf*, *sarīf* および *mutaqārib*) を用いている。このため、彼の詩といわれているものが、そのとおりかどうか、疑問視されてきた。しかし、全てを偽物とする根拠もない。彼は意味の取りにくい難解な語をよく用い、構文にもあいまいな箇所が散見される。ただ、彼は6世紀初に活躍した詩人といわれているとおり、かなり古層の詩であることは明らかである。この詩をめぐる、前記のような逸話が語られているところから推測されるように、彼は恋を主題とした詩人であった。この詩はカーミル (*kāmil*) 調、7行。

(No.45) テキスト

وَقَالَ الْمُرْقَشُ الْأَكْبَرُ

- | | |
|--|---|
| ١ - يَا صَاحِبِي تَلَوَّمَا لَا تَعْجَلَا | إِنَّ الرَّحِيلَ رَهِينُ أَنْ لَا تَعْذُلَا |
| ٢ - فَلَعَلَّ بُطْأَكُمَا يُفْرِطُ سَيِّئًا | أَوْ يَسْبِقُ الْإِسْرَاعُ سَيِّبًا مُقْبِلًا |
| ٣ - يَا رَاكِبًا إِمَّا عَرَضْتَ فَبَلَّغْنِ | أَنْسَ بَنَ سَعْدٍ إِنْ لَقِيتَ وَحَرَمَلَا |

- ٤- لِلّٰهِ دَرْكُمَا وَدَرْ أَيْكُمَا
 ٥- مَنْ مُبْلَغُ الْأَقْوَامِ أَنَّ مُرَقَّشًا
 ٦- ذَهَبَ السِّبَاعُ بِأَنْفِهِ فَتَرَكْنَهُ
 ٧- وَكَأَنَّمَا تَرَدُّ السِّبَاعُ بِشَلْوِهِ
 إِنَّ أَفْلَتَ الْعُقْلِيَّ حَتَّى يُفْتَلَا
 أَمْسَى عَلَى الْأَصْحَابِ عَيْنًا مُثْقَلًا
 أَعْنَى عَلَيْهِ بِالْجِبَالِ وَجَيْئَلًا
 إِذْ غَابَ جَمْعُ بَنِي ضُبَيْعَةَ، مِنْهَا

No.45 訳

- 1- わが友2人よ、(旅の準備のため) しばし、留まりたまえ。急いではならぬ。旅立つ (前に十分備することが) まこと、非難されない¹⁾担保である。
- 2- おそらくは、君たち両名が出発を遅らせば、悪事を避けることになろう。また、性急に旅立てば、得られるべき幸運に恵まれないであろう²⁾。
- 3- おお (ラクダに) 乗っている者よ、アルアルーダの地でアナス・ブヌ・サアドとハルマラに会ったなら、私の伝言を届けてくれ³⁾。
- 4- 君たち2人と君たちの父御は、なんと気前の良い方々であろうか。たとえ、グファイラの男が殺されないように逃げたとしても⁴⁾。
- 5- 「ムラッキシュは御伴をする我らにとって重荷になった」とわが部族に伝えるのは誰か。
- 6- 野獣が彼の鼻をそぎ、山の中に捨て置き、毛が多い雄ハイエナと雌ハイエナが彼の死を待っていた。
- 7- ドゥバイア族の者たちがすべていなくなると、野獣どもは、水場に集まるように、彼の亡骸のところにやってきた。

1) *taḍḥulā* とテキストにあるが、*tuḍḥalā* 「非難される」の読みもあり、これに従った。

2) この詩の1-2行は、「ぐずぐずして旅立ちを遅らせると悪事に見舞われるかもしれない。また、慌てて出発すると幸運をやり過ごすことになる」の意で、前記逸話とかかわりがない出だしとなっている。

3) *ʿaraḍa* 「アルアルード (al-ʿArūd) 地方に行く」。アルアルード地方とは、メッカとメディナとアルヤマン周辺のこと。アナス (ʿAnas) とハルマラ (Harmala) は詩人の兄弟。

4) *ḥattā yuqtalā* < *ḥattā lā yuqtalā*. すなわち、否定詞 *lā* が省略されている。「グファイラの男 (al-Gḥufālī)」は詩人を洞窟に置き去りにした女召使の夫のこと。